

---

# ネメシスと仲間たちが幻想入り

xhanku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネメシスと仲間たちが幻想入り

### 【Zコード】

N6098W

### 【作者名】

xhanku

### 【あらすじ】

目が覚めれば知らない森・・・そして知らない強靭な体と強そうな武器・・・とりあえず探索・・・そして・・・そこから始まった物語

この小説はBIOHAZARD × 東方Projectの一次創作です・・・馳文で初めて書いた小説です。  
ああ・・・あと、タイトル変えました。

追記で、不定期更新です。

## 転生やられぬでの出来事（前書き）

この小説は”駄文”で、できており……下手すれば崩壊します……

(h . . . )

ふと、目が覚める・・・

見めた目は映ったのは田舎の風景ではなく…………真っ白い空間

（「…」）これはもじきヘターナ展開か？…たとすれ  
ば（）の後は…

「... せじこひ、やのめ」

中途半端なところで年老いた声が聞こえた

(ああ……じじいか……)

たれかじじいじやい！わじやじじいじやないわい！」

（ふたりと喧嘩しておひこはは）

目の前には仙人のような・・・でも・・・どこかおかしいおじいさ  
んがいた

「わしゃな！ これでも若い方じゃわい！ まだ成り立てのピッヂピチ  
じゃーー！」

(・・・ヨボヨボの間違えでは?)

すると・・・おじいさんはブルブルと震えだし・・・

「おのれえ！貴様の転生先を考えるはずなのに、なぜ罵倒されにやあかんのらああああ！－！」ボンッ

おじいさんから変な音と変な煙が出てきた。

そして、煙が晴れた先にいたのは・・・

（・・・？何やつてんの？お兄さん）

自分より3ヶ月年上の兄がいた

「・・・もう疲れた・・・適当に転生させてもいいわ・・・」

（えッ？！）

兄がそういった後、突然まぶたが重くなつた。

意識が無くなる前に見たのは・・・頭を抱えた兄だつた・・・

## 転生するまでの出来事（後書き）

あつやりゅ・・・プロローグはこんなのでいいかな？

転生先はネメシス（前書き）

尚・・・」の小説は駄文でできてるやんに・・・

## 転生先はネメシス

(ん・・・) は・・・)

目が覚めれば知らない森・・・

(はで・・・兄さんは何故頭を抱えていたのだ?) は・・・)

こんな状況でもまったく関係の無いことを考える・・・

(やひこや・・・名前なんだっけ?)

7

「」でふとそんなことに気がつく

ここに来るまでの経緯で、まったくもって自分の名前が出なかつた  
ことに少々驚きつつ、考える。

だが・・・

(全然思いつかないや )

名前を考えることを諦めて、今度は自分について調べる) は・・・

(なん・・・だと・・・)

自分を見てみると

- ・強勒そうなちょつとムキッとした体
  - ・ちょっとカツコイイ ロングコート
  - ・ロケットランチャー・ガトリングガン
  - ・手の中にちゃつかりと隠れてる棘

あのバイオハザードプレイヤーを苦しめたあの”**追跡者**”  
ネメシス

（あのトラウマとも言えるストーカーか……だが何故自分がネメシスに？）

ふと、兄の「適当に転生させちやえ！」的な発言を思い出す・・・

( なむほゞ・・・ )

若干怒りを覚えたネメ시스は適当に発散できるものを探す

# 「ガサガサッ」

「グオオオオオオオオオオオオオツ！！」

ちょうどいいタイミングで巨大な熊が現れた

「ウワアアアアアアアアアアアアツ————！」

この日、山中に、鬼熊と得体の知れない者の雄たけびが響き渡った

「ハア・・・ハア・・・殺つた・・・のか?・・・ハア・・・ハア・  
・・」

雄たけびを合図に始まつた戦い・・・

ネメシスは腕と腹に爪の傷跡がついている

しかし、鬼熊の方は右腕と左足が無くなつており、下あごは180°曲がつていた。

(だが・・・後もつちよいで完治するだろ・・・)

ネメシスは休むことにした・・・

十分後

いくら待っても人間と同じ再生力

三十分後

未だに人間と同じ

それに、空腹感もある・・・

仕方なく先ほど倒した熊の腕と足を捕食すること・・・

すると、再生力と体力と筋力が上昇した・・・

どうやら普通のネメ시스ではないらしい・・・

倒した相手の一部を食べば、何かしらを得るか、上昇するかっぽい。

だが、全体ではどうなるか・・・試しに捕食してみた

## 結果

食べる部分が増えたため、更に上昇した

ネメシス（仮）は、完治した後・・・寂しくなつたので森を抜けようとしたよ」と進むことにした。

転生先はネメシス（後書き）

名前工  
・  
・

神は言つてゐる・・・「」で落チルノだと・・・（前書き）

駄文ですけど・・・何か？

・・・そういうや執筆中小説つてとこ、何も無かつたな・・・

神は言つてゐる……」で落チルノだと……

しばらく森を進むこと約一八〇分……巨大な湖に到着

「でけえ……」

あまりの大きさに開いた口が塞がらない

そしてここで、頭に何かが伝わる

(話をしよう)

「……………は？」

・・・・突然青年の声が聞こえてきた

(あれは今から3回「お前誰だよ……」いや……一万4  
S「誰だよ?」「……」)

ひとつあえず名前を聞き出すこととする

(私には72通りの名前があるから……なんて呼べばいいか……

・

「・・・」

とつあえず待つ」と・・・

(・・・まあいい・・・私と「よべねえよ」・・・)

スルーされそうになつたから阻止

(ハア・・・神だよ・・・)

「紙?」

(神だー)

「なんどー」

自分・・・どこの宗教者じゃないのに神の声が聞こえるなんて・・・

・ありがたやあ・・・

(これからその体について説明する・・・けど・・・)

「ん?」

(そんな装備で大丈夫か?)

「何故?」

(「この世界では”弾幕ごっこ””という遊びがある・・・その中にスペルカードつてのがある。)

「ふむ・・・」

(その”弾幕ごっこ”つてのは・・・)

（なんでも・・・相手が倒れるまでボコリ合づ遊びとか・・・負けた方は勝者に従う・・・そうだ

（それでだ・・・お前にスペルカードを追加してなかつた・・・）

（ちなみに、そのガトリングとロケットランチャーは弾が切れないし、

ロケットランチャーにいたつては誘導性もある。）

「なん・・・だと・・・」

（だから・・・必殺技決めるために・・・どんなスペルカードがいい?）

「一番いいのを頼む」

(・・・じゃあ、無し)

「なに?」

(どうした?・・・私のサポートが心配なのか?)

「いや・・・ハア・・・」

(ちなみにスペルカードなんて名前書いて適当に弾ばり撒きやいいよ)

「そうなのか?」

(もうだ)

「・・・わかった。」

(それで・・・その体は・・・)

長いので省略すると

- ・捕食するといひよつと経験地つぱく何かが上がる
- ・「」の「」は防弾でも無いから捨ててもいい
- ・形態は自由に変えることができる（1と2は楽だが・・・3は時間がかかる・・・つまり正常・触手 はすぐ変形できるけど巨大な怪物は時間がかかる）

・会話でもある瞬と、自我、前世と同じ思考回路がある。

からこそ・・・この後、脳内テレパシーは終わった。

（わて・・・・・じつようかな・・・）

「神は言つてこる・・・・・全てを救えと」

「ツ?..」

声のした方に振り返ると、青を基準にした色のひつひつやい子が浮いていた・・・

「神は言つてゐる・・・アタイは天才だと・・・」

「・・・」

「アタイは言つてゐる・・・天才は弾幕『』で勝つのだと・・・

「アタイは言つてゐる・・・天才は弾幕『』で勝つのだと・・・」

「アタイは言つてゐる・・・機会だから弾幕『』をしてみることとした。

神は言つてゐる・・・「」で落チルノだと・・・（後書き）

ああ・・・やつぱり・・今回も駄目だったよ・・・俺は文才が無い  
からなあ・・・  
そうだな・・・次はこれを見ている奴に・・聞いてみるよ・・・(い  
いないと思つ)

戦闘描画かあ・・・難しそうだな・・・

## 初めての弾幕「」（前書き）

はじめての弾幕「」

前書き ああ・・・テスト（15・16）終わったあとHターナル  
シティー2やりこんでたwww・・・すんません・・・つて・・・  
誰に謝ってるんだろ・・・俺

## 初めての弾幕「」

とある大きな湖の端にて

(田標= =スター= = =)

「スタアアアズ！」

「フン！ そんな叫び声出して、アタイの強さがわかつてんのね！」

(ありや？ まんか青少女が凄い……大抵は咆哮で怯むのに  
(鬼熊とか) )

そんなことに関心を持つたネメシス

(・・・まあそつちの方が好都合だ！)

だけどそれでもちょっと余裕そうなネメシス

でも・・・チルノはといつと、手のひらを向けている・・・

「これでも喰らええ！」

突然チルノが小さな氷の粒を出してきた・・・しかしその氷もただの氷ではない・・・

先端が尖っていて貫通性を備えていて、後ろの方はコントロールをよくするために大きくなっている

・・・しかもその氷が数百・数千個といちらで向かってきている

「なん……だと……まともに喰らつたら蜂の巣じゃねえか！」

対するネメシスはガトリングをその氷の大群に向けた

そしてトリガーハッピーの「」とし、まばらにばらまいた。

ガトリングガンからものすごい弾が発射される・・・

ほんどの弾は外れて空を切るが……それでも弾はテカくて強い……

当たれば粉々・・・かすればその部分の大半を削り取る。

「な、なんなのよー。その弾幕はー。」

流石にこれには驚きを隠せない青幼女

「ふ、フンーまだよ！」氷符「アイシクルフォール」

今度は左右に氷が飛ばされて、徐々に近づいてくる

しかも真ん中からもチルノを中心にして氷が飛んでくる

「おこ・・・・やつあやの『トタラメ』なのと違ひじゃないか

『うすれぱ』いか考える・・・考えてるとか、ふと頭に文字が浮かび上がる

「追跡する程度の能力」

ヤバいやせニヤウトイヤウト・・・

# 「追跡」「死の予言」

( し せ わ な こ ・ ・ )

# 「追跡」「死の予言！」

すると、その弾幕に間があることが分かった。・・・

そこに身を投じて回転してチルノを狙える場所に移つた  
ローリング

! I judge the judgement on fools  
dirtying an ideal of  
h a reputation of the  
S t . M a r i a

祈りの言葉の締めと同時に、持っている口ケットランチャーの弾頭をチルノに向けてトリガーにかかる指先に力を入れた。

「Amen!」

ズドンッ！

弾頭はそのままチルノに向かって・・・

爆発した

「うわあッ！

「チエックメイト・・・

湖に落ちていった。

「あ・・・名前どうしょ・・・なんかカッコイイ名前がいいな・・・

」

そんなことよりも名前を気にするネメシス（仮）がいた

## 初めての弾幕1JFC（後書き）

後書き 名前：ネメシス（仮）

スペルカード：チエイク追跡タナトスプロフェシー「死の予言」

相手の名前・攻撃・行動を理解する・・・そして死まけをプレゼントする

アサシン「ファンタジア暗殺チエイク「幻想追跡」」

相手の臭いなどを分析して光として対象を追跡する

今のところこんな感じかな？・・・不定期更新になっちゃったw  
誰か名前を俺に分けてえw

森の女...これ...田舎...の...元... (前書き)

やつとMY PC 帰つてキタアアア――――――

## つてなわけで投稿

た  
W  
W  
W  
・・・まさかこの小説が評価されるなんて知ったときは嬉し涙出

森の中へいれー玉座ー・・・・の魔力・・・

T - N - E - M - S - I - S C S i d e

「アタイを弟子にして!」

えーっと・・・現状報告します

チルノズドンツ! 湖に落チルノ 余裕かましてた矢先に田の前に  
? 「強いから弟子にして」 b y?

で・・・その弟子弟子 C a l l がものすゞくしつこ・・・

「アタイを弟子にして!アタイを弟子にして一値をナシにして!ア  
タイを出汁にして!・・・あれ?」

そしてこいつは狂っていたわけではなく、ただのバカだということ  
も分かった・・・

「アタイを弟子にして!アタイをd 「あああーもうー嫌だつてb  
その”呻き声”はいってことだよね!」

えつ?今なんて?

チルノ曰く・・・

- ・喋つてるのは全て呻き声
- ・「スタアアアズ！」って雄たけびは物凄くかっこよかつた
- ・自分を撃つ時も呻いていたけど・・・何かしら知らない言語も聞こえた

とれり

tiluno Side

（こんなサイキョーがいたなんて思つてなかつたわ！）

目の前には結構戸惑っているネメシス（仮）さん

（見た田は、ちゃんとピロイナビ強いかが、やつはやせっこ化け物だわ！）

……いざ」で見た「美〇と野〇」でも思い出したのだが、

(「Jんなことがわかるアタイはやつぱり天才ねー。」)

「ウラオオオオオオオオオオオオオオオオー……………」

突然雄たけびを上げた醜鬼ネメシス

(あつとアタイを弟子にできたからうれしいのねー。)

ポジティブで生きる彼女は、物凄く怒っている”彼”に感づく事は無かった

Side out

T · N · E · M · S · I · S C Side

(ちくしょー! なんだつてJんなJとJ・・・)

チルノに辛い現実を教えられた今、どうしようか考え中である・・・

## 「ガサガサッ」

そんなとき、後ろで誰かの近づく気配がした

!

メタ○アの蛇を見つけたかの如く、頭の上に太い赤いビックリマークを出しながらそちらに銃を向ける

だが・・・出てきたのは人間

・・・それもこの辺に住んでいたようだ・・・ちよつとばかし追跡  
しよう

なんせ俺は  
”**追跡者**”<sup>チエイサー</sup>だからな・・・

そんなことを考えた自分を殴り返したい・・・

「全員ーこの村を守るんだ！それに”慧音”さんもいるから百人力  
だ！」

なんでこうなる・・・

## Keine Side

(なんだ、あの化け物は……)

人里の入り口で、戸惑っている様子を表しているネメシス……しかし、その行動は逆に威嚇しているように見える……

〔ウウウ……オウ……ウアオウ……〕

何やら話しかけているようだが……どうしてか喧嘩になってしまふ……

(もじもじ……?)

「歯の者! 武器を收めろ! そしてその化け物に紙と筆を貰えてみよ

!」

一か八か……

T - N - E - M - S - I - S C S i d e

なにやら村人が武器を収めた・・・

その行動に胸を撫で下ろす仕草をしようと思つたが・・・誤解されると思うのでやめた

そして紙と筆を渡して來たのでその紙に挨拶でも書いて見せた

〔 H a l l o 〕

しかし・・・ここは”幻想郷”という場所であり自分のようなものを”外来人”なる者だということを知らない彼は・・・後悔した

## ザワザワ

「おいつ・・・あれって外来人か？」

「だとしたら・・・でも外にも化け物ついていたんだな」

「外つて饅頭とかおうどんあるかな？」

そんなんざわついている中・・・気配を探つていなかつた自分が悪かつたのだろう・・・

後ろで”RPG-7”という対戦車ロケットランチャーがこちらに向けられていたことに気づかず

パスッ！と小さな音がしてわずか3秒、自分の胴体に弾頭が刺さり・  
・破裂した・・・

しかも自分は普通のとは違つて育成型・・・それなりの再生力は上がつたから死にはしないが・・・

力も無く、地にひざまついて、そのまま無力に倒れた

「フハハハハ！アンブレラの『ガーリー』まで来るとはなッ！」

そこには、謎の白衣を着た20半ばの男が興奮した田でじりじりを見つめていた。

森の中へ出て、田舎の（後書き）

・・・なんぞ？」の駄文

つてなくらいひどい有様になってしましました・・・ハイ・・・

なにかしら想いついたので途中でこの続きを消してしまったwww

ありや？・・・これじゃあ言ひ切か・・・まあ何とか修正加えてみる（ネメシス）

とある地下施設にて（外話）

Side ???

「――」コライ君・・・いつたい何が・・・

「見ての通りだよ・・・セルゲイ大佐・・・あの ms パープル嬢にハメられたのさ・・・」

「クツ・・・（家族が一人消えてしまった！）」

数時間前の出来事

「スバラシイ・・・これぞ究極の生物兵器（B · O · W）だ・・・」

何かとても欲しかった物を買い与えられた子供のように田を輝かせながら言つているとある兵士

「クツフフフフ・・・これで”イワン”たちに新しい家族が加わるな！」

「それは光榮ですね、大佐」

それに続くとある兵士

二人は常に”死んでいる”はずだ・・・しかしながらも生きているのは、とあることがあつたからだ

そのとあることは、また後に説明する

二人の前にあるのは、デカデカとした防弾ケースの中にいる特殊な  
”ネメシス”

「育てるのがたのしみだよ・・・」

このネメシスを作り出せたのは、とある天才学者”M.S.パープル  
嬢”が手伝ってくれたからだ・・・

そして二人が去つた後に、何者かが侵入してネメシスを持っていき、  
現在にいたる

無論・・・こんなことができるのは、皆を元<sup>ス</sup>存知の通り、あの”  
スキマBBA”d(ピチュー)

「・・・クッ！」

とても悔しさなどが抑えきれないセルゲイ

「・・・まだあの資料は残っていたはずです・・・それを元にまた作つてもらつては・・・」

それをなだめようとする二ノライ

「また作れだと？！家族は一方も欠けてはいけないんだ！殺されるならともかく、奪われただぞ！？」

だがそれも逆効果になつてゐる・・・

「だが・・・」

「いいから探すぞ！」

こうしてヘリポートに向かつた一人だった・・・

のある地下施設にて（外話）（後書き）

・・・短すぎて話にならねえ・・・これじゃあ読んでくれた人なんて言おつ・・

ちなみに”後に”つてのはここのこと

セルゲイはウェスカーに殺されたけど、すぐ後に復活してスキマ送りって感じで

ニコライはB・O・Wに殺されたけどTに感染して復活・・・しかも普通のゾンビではなくね・・・まるで吸血鬼に従える狼男のよつにWでもってスキマ送り

こんなかんじかな？

・・・ちょっとした設定説明（現時点）（前書き）

やつべ・・・これ見ない方がいいかも・・・ってかこれ消したほうがいいのかな？？

## ・・・ちょっとした設定説明（現時点）

「」までのストーリーまとめ

とある男が転生（？）してネメシスに

そのネメシスがいろいろと説明を受けるけど「トマも多い

ネメシスが散策中にチルノと会つて、チルノと戦う

チルノに勝つけど弟子にしてとせがまれる

せがまれながらも無視しつつ先に進んでいくと、村人に会つ

村人を<sup>ストーカー</sup>追跡していると”人里”に着く

人里では、新手の妖”<sup>しゃうつき</sup>醜鬼”と名づけられ警戒されてしまう

慧音がとあることに気づき、紙と筆を渡すが、ネメシスは外国製のために、英語で書いてしまう

村人は外の人だといつに気づき、武器を収めるが警戒を怠らない

そんなときに背後からウイー・・・研究員にRPGを撃たれてしまう（現時点は「」）

「」から先はもう思いついてるから今日中に何とか書くよ

で、その他で表現するんだけど・・・ニコライとセルゲイの説明は表現しにくいからここで書く  
(ネタバレ注意!)

ニコライはジルと交戦中にB・O・Wに殺されるんだが・・・その後奇跡的にTとの融合に成功して洋館にいた不死存在の・・・誰だつけ?・・・あ!リサ・トレヴァーだ!

そのリサと同じ感じになつて、復活・・・だけビスキマ送りでどいかの地下施設に・・・

セルゲイはウェスカーと対戦してて首を落とされて、敗北・・・その後首と共に地下施設へスキマ(r.y)きつと現地にいた対バイオテロ部隊も不思議に思わなかつたのは着く前にスキマ送りされたからでしょう・・・

その後、Ms.パープルなる紫が、首と胴体を繋げて復活せる・・・

そして、セルゲイとニコライの関係性だけど・・・アンブレラクロニクルズやつてた人は分かるかも知れないけど・・・実は手紙を回すほどの仲だつたんだよねえ・・・

で・・・外話を簡単に説明する

セルゲイ及びニコライをスキマで幻想郷に作った地下施設に送る・・・  
・いや・・・無理があるな・・・

セルゲイ及びニコライをスキマで幻想郷に送つて・・・新しく土地を作つてスキマ送りした研究施設に送つた・・・無理やりながらもこれでいいかな?

そこで、Ms. パープルの送つてくれた余りの被験体でイワンとイワンの新しい兄弟を作ることにしたセルゲイ・・・しかし、研究員などが足りない・・・そこでまた提供してもらつことにした・・・

そして・・・イワンたちは先に完成したけど、その兄弟をどうしよ  
うか迷う羽目に・・・

そんな中、ニコライがラクーンでの出来事を思い出して、ネメシス  
はどうか?と・・・

セルゲイはその提案に大賛成・・・なんでも  
「すばらしいぞ!私の家族は恐れを知らない!」

らしい・・・正直よくわかんない・・・

だが、その提案でセルゲイは

「できれば育成できるのがいいな・・・なんか・・・レベルアップ  
とかありそうな・・・」

その発言にニコライと、この会議(?)に参加していた研究員の責任者たちは目を見開いて驚いた  
なにせ、”あの”セルゲイがこんなことを知つているなんて予想す  
ることもできないからだ・・・

そこで、一人の研究員が

「じゃあ、人間の機能をちょっと向上させたようなネメシスはどうでしょうか？」

と言つた・・・その発言にセルゲイはまたも

「すばらしいぞ！それでこそ私の家族にふさわしい…」

と・・・意味不明なことを言つていた・・・きっとそれほど楽しみなのだろう

しかし・・・このような実験はあまりにも難しかつた

なにせ、ただ言つことを聞いてくれる殺人兵器と違つて、まるで育

成ロボットの生物型・・・

つまり、人工ペットのようなものを作れと言つているのだ・・・

作成していく、被験体のおよそ2／4を使った時の事・・・ついに一つ完成した・・・

（外話）

これにはセルゲイは大喜び！

ニコライもちょっとと喜んでいたりする・・・

（外話）

しかし、あらうひとかその成功作を盗まれてしまう…

可能性的に考えて、あのスキマBB（ピチュー

そのことでセルゲイは大激怒！

しかし、ニコライは焦つた・・・何せ命を救つてくれた恩人（？）

しかもそいつはこの世界の創造者

勝ち目など無いし、恩知らずと思われてしまつ

そのことでなだめようとしたけど、セルゲイは一向にやめてくれない・・・

そしてへりに乗って幻想郷を探しまわることに・・・  
(いま□□)

・・・ サーセン・・・ 僕はこんな文が限界みたいですね・・・ サーセン・・・ ごめんなさい

次にネメシスのスペックだね

死後（爆死後）のネメシスのスペック調整

名前：ネメシス C （誰か名前提供お願いします）

腕力：タイラント量産型並  
脚力：タイラント量産型並  
筋力：タイラント量産型並 + 3  
速度：タイラント量産型並  
体力：タイラント量産型並 + 3  
再生力：人間と B · O · W の中間並 + 1  
知能：人間  
自我：人間  
会話力：ゾンビ並たまにネメシス

・・・つまりほとんど量産並みだけど、鬼熊から貰つたので体力と

筋力が上昇・・・尚、10になるとランクアップ

スペルカード能力のバグ修正（爆死により神がバグ修正）

追跡「死の予言」  
チエイクス タナトスプロフェシー

・敵の弾幕を覚る

・このスペルの弾幕は祈りを唱えた後に攻撃すると大打撃を与えられる（謎）

この弾幕は、真っ直ぐに飛ぶように見せて、油断させた後に後ろからヒーローとして誘爆ホーミング

祈りを唱えた場合は、ホーミングしないため・・・ちゃんと狙う必要がある

・・・名前は適当・・・かも

暗殺「幻想追跡」  
アサシン ファンタジーキャット

・速度が金髪タモリ並になる

・自分の能力「追跡する程度の能力」の効果範囲などが、伸びる

・このスペルでの弾幕は、近距離（2・5m）までしか届かないが、

攻撃力は絶大（？）

この弾幕は、ネメシスの腕の中にある棘が主な攻撃・・・一応トウ

イルスは抗菌されているため、

ありません

暴君<sup>タイラント</sup>「強者の咆哮」

・「」の辺の説明は、特に無し……ただ、このスペルは咆哮をする

このスペルの弾幕は、放射線上に出でてくる……  
一つの弾幕から2つに、4つに、8つに、と翻算に増えていく

次は能力について

『追跡する程度の能力』

これは……ある意味チート?

まず、目的を見失わない……暗いところでは青白い光として……  
明るいところでは赤い光として表 示される

追跡できるのは、とにかくなんでも……

こんな感じかな?……以上!!

・・・ちょっとした設定説明（現時点）（後書き）

・・・よくわかんない・・・これじゃ読者が減りそうだ・・・  
まあ後々また書くかも知れない・・・

知らない天井とかセルゲイとか（前書き）

あああああ・・・一人称だけになつてしまつた

## 知らない天井とかセルゲイとか

ふと田が覚める・・・

だけどなぜ「こんな」ことになつているか理解しにくいため

さつさまでのことをちょっと走馬灯のように繰り返してみる

1 村人を追う

2 村人に囲まれる

3 RPGで撃たれる

(・・・よくわからんねえ・・・)

「お？ 田が覚めたか！」

ふと近くで女性の声が聞こえる

「シシヨーはサイキヨーだからねーゼッタイ死なないよー！」

それと幼い声が聞こえる

その声はきっと・・・いや・・・絶対チルノだらつ

「ありがと」

上半身を起してお礼を述べた  
届かない……。やう思いつつもせめて御礼だけは言つておかないと・  
・そう思つて発した言葉だが

「なッ！喋れるよ！」になつたのか！」

（はい？俺の声ついで神を頼なんじやなかつたつけ？）

「シシリーが喋つた！」

（・・・じつこひことだ・・・？）

まさしく謎だ……森にいた頃は神を頼だつたのに、それに……

「チルノ……お前いつからいたんだ？……あと、俺は師匠にな  
つた覚えは無い」

チルノだ……村人を追跡しているときにはいなかつたのに……  
いつたいど」から

「ああ、チルノは寺子屋に来たんだが・・・お前の騒ぎで抜け出したんだ・・・なんでも『シシヨー！』んでシシヨーの半分が無いの？』って言つてな、お前について来たんだ」

「なるほど・・・

「あと、村人たちは処分しようと思っていたけど、チルノが『シシヨーはサイキヨーだから休めば復活するもん！』って言つてお前の処分を阻止したんだ・・・それがまさか・・・ほんとに復活するとはな・・・」

その話を聞いたネメシスは、あとで何かしてあげることに決めた（  
師匠になる以外）

「ああーそうだった、自己紹介が遅れたな・・・私は上白沢 慧音けいねだ、この人里の守護者 と寺子屋の先生をやっている・・・お前は？」

「俺は・・・名前なんて無いが・・・なぜかこの世界に来ている、  
とこつよつーことじだ？」

自己紹介とも言えないことをして、質問をしてみる

「ここは幻想郷だ、妖怪や人間が共存している場所さ」

なるほど……と頷いた  
それならチルノのような妖精や怪物<sup>フェアリー モンストル</sup>がいてもおかしくないからだ

「人里の他にも、妖怪の山、旧都、マヨイガ、霧の湖、紅魔館、冥界……他にもいろいろある」

(・・・何このファンタジー)

今言われた場所の中には不思議な箇所が多くたため、こんなこと言えないわけがない……

そんなことに驚いていると、ドタドタと廊下を駆けてくる音が近づいてきた

「た、大変です！慧音さん！」

「廊下は走るな！」

見たところ……ただの農民のようだ

「すみません・・・つて！ そうじゃなくてですね！ 空から鉄の馬車のよつなものが降りてきたんですよ！」

「何？！」

（鉄の馬車・・・？・・・はて・・・なんだろうか）

”鉄の馬車” これに突つかかつたネメシス

「すまないが、話はあち「いやー俺も行く！」ツーおい！ 体のほうは大丈夫なのかツ？！」

突然立つたことに驚く慧音さん  
だけどネメシスは、さつきのやつが・・・もし人間に害を成したら  
と思うと休んでいた

「体は大丈夫だ・・・それより、俺の装備はどうした？」

「あの変な鉄の棒みたいなのが・・・あれならお前の足元にある  
が・・・」

足元にあつた

地対空ミサイルロケットランチャー「スティングガー」と

重機関銃「M134ミニガン」を背に担ぎ、騒ぎの元に向かつた

騒ぎの中心には、「ブラックホーク」というヘリが停まっていた  
そしてそこには

「見ろー。ニコライ君ー。あそこに私の家族がいたぞー！」

「そうですね、セルゲイ大佐」

嬉々としているセルゲイ大佐と、憂鬱感が漂つているニコライがいた

「我が息子よおおおおおお……！」

そしてセルゲイは両手を広げてこちらに走ってきた  
正直、なぜこの二人は生きていて、自分を家族と呼んでいるかが分  
からなかつたネメシスは、  
呆然と突つ立つたままおとなしく抱かれることにした

「会いたかつたぞ！ 我が息子よー！」

そしてこの威勢の無さと、重度の親ばかっぽさを漂わせている人は、  
知らない人が見れば『何あの親ばか』で済むが、本来のセルゲイを  
知っている人たちから見れば『あ、あのセルゲイ大佐はどこに行つ  
た』などというキャラ崩壊に頭を押さえかねない

偶然にも人里の人たちは、かの「バイ〇ハザ〇ド」を知らないわけ  
で・・・

「微笑ましいなあ」

「いいなあ・・・あんな父さん」

など、羨ましい視線でこっちを見ている・・・しかし

（なぜ誰もこの”人間と化け物”の親子関係をおかしく思わない・・・  
・）

そう・・・セルゲイは人間であり、ネメシスは”生物兵器”である。  
・・

「セルゲイ大佐・・・そろそろ戻りましょう」

そんな疑問を抱いていたら、ニコライが帰りたいと言つた

「まあ、そう急かすな・・・せつかくの親子の再会だ！今日はちよ  
つとした”会話”でもしようかね」

「ツー大佐！まだ仕事中ですよー」

セルゲイの会話という単語にニコライはものすごい反応を見せて、  
それを阻止しようとした

「まあいいじゃないか・・・そんなんならお前も来いー！といつか命  
令だ！」

このやり取りが普通の若手社員と、中年上司なら分かるが・・・  
人はおっさんだ。

ニコライは白い髪をオールバックした髪型と数々の修羅場を抜けて

きたような（事実的には抜けてきた）「ゴツい顔

セルゲイも白い髪だがロン毛だ・・・そして顔も一コラリイよりつむじ  
つと優しそうな顔だ

「ですが・・・」

「これは”命令だ”と言つたぞ？」

「そう・・・でしたね！」

セルゲイがニヤけながら言つと、一コライの憂鬱感がふとんで嬉  
々としたオーラが漂つた・・・  
どうやらこの世界では、軍人もクソも無いようだ・・・まさに幻想郷

「やうと決まればその辺のカフェにでも行こうかね！」

「了解です、一コライ大佐」

それで話が終わつたようだが・・・まだ付いていけない・・・とい  
うより付いていけなかつたのが

一匹

「あの・・・一体どこに行くんで？」

ネメシスは聞いてみた

「何を寝ぼけたことを言つてゐるんだ？お前が帰つてきたから祝うんだよ！」

セルゲイは迷い無く答えた

「またせたな！ 一体どうな・・・つて・・・なんだこれは？」

そこに慧音さんがやつてきた

そしてただ一人だけこのカオスに気づいた

「おお！ 美しい方もいるじゃないか！ 一緒に飲まないか？」

その慧音さんに誘いをかけるセルゲイ

「あ・・・ああ、ああ！ いいだろう！ 私も話があるのでな！」

突然相手に誘いを受けた慧音さんは戸惑いながらもその誘いに乗つた

「よし！じゃあいい店を紹介してくれ！」

「わかった！私の知っている団子屋に行こう！」

こうして、セルゲイ一行は、ネメシスの背中ににくつついている氷精といっしょに団子屋に向かった

あと、セルゲイ達が去った後に、ブラックホークを興味津々の目で見ていた河童がいたとか・・・

知らない天井とかセルゲイとか（後書き）

・ 駄文・・・だね・・・あとセルゲイとかキャラ崩壊しちゃってる・・

## 紅魔郷異変までの出来事（前書き）

えつとね・・・まあがんばつてみるよへへ  
ちなみにまた一人称だよwww

## 紅魔郷異変までの出来事

「いやあ上白沢殿は『』の守護者であったかーそれにしても美しいお方だな！」

「かたじけない・・・そんな褒め言葉を言つてもなにもでないぞ？」

「いやいや、現に美しいお方が出て『』るじゃ ないかあ！ ワッハッハ

ハ

現在団子屋でくつりいでいるところだ。

慧音さんは三色団子  
二口ライは餡団子  
セルトイとチルノは、みたらし団子  
ネメシスは緑茶

このメンズでこんなところでこんな風に食べたり飲んだりしている風景はどこかカオスだらう  
しかしそんな違和感もすぐに消えてしまつ会話をしている

「しかし、そなたたちのような者たちがこの鬼の親だとはなあ・・・  
正直驚いた」

慧音は未だにネメシスが生物兵器といつ人工的に作られたものだと  
言つことに気づいてなく

自然に生まれたものだと思つてゐる

「鬼？ 息子は鬼なんかじゃ あない！ 私の息子さ！ ガツハツハ！」

そしてこのバカことセルゲイも、どこかおかしい

「シシヨーは鬼じゃないよ！ 鬼はつのがあるもん！」

追跡者を追跡した？ 青幼女ことチルノは何かを間違えている  
ネメシス

「・・・」

無言で団子を食べているニコライ  
しかしその姿は物凄く様になつてゐる

そしてその話の主人公はといふと

「・・・（緑茶がうまい）」

緑茶を飲んでいた

しかもその緑茶で集中力がアップしている

団子屋はとてもひしゃかになっていた

そして、団子屋での会話が終わった後の話

T · N · E · M · · S · I · S C  
S i d e

団子屋での会話が終わって、慧音とチルノは帰つて行つた

(緑茶がうまかった、また今度寄つてみよう)

とても緑茶の味を氣に入つたネメシス  
そんな時、ふと「コライが言つ

「ありや？なんか空が”紅い”ですねえ」

「ム？ 本當だな・・・ だが夕暮れよりも紅いつてことはまだないわ  
じだ？」

そんな会話を聞いてネメシスは視線を空に向ける

空の雲は霧のようになつていて、 そんでもつて紅い・・・ ブラッシュ  
カラーをちょっと鮮明にしたかのよう

「セルゲイ大佐と二コライさん、 ちょっとこの霧を出してこないと  
ろまで行つてみます」

ちょっとと面白そうだったからそつしてみることに決めた

「ん？ 行くのか、 だつたら氣をつけて行つてこい・・・ あとでその  
霧の出でこるとこにA・B・C・Dを送るよ

セルゲイのこの言葉にネメシスはまたも驚いた

U・B・C・Sは、ラクーンシティーへの導入でかなり失われて、U・B・C・Sは消え去ったはず

アンブレラは1998年9月26日、  
非正規の私設部隊U・B・C・Sを4部隊200名をラクーンシティに投入した。

「市街地の掃討、市民（アンブレラ関係者を優先）の救助及び市外への避難」が目的だつた。

生存者は数えるほど少なかつたばかりか、苛烈な状況下において逆にU・B・C・Sが壊滅する事態に陥つた。

また、U・B・C・Sの中には「監視員」と呼ばれる工作員が何人か含まれていて、彼らは「U・B・C・Sの監視および戦闘データの回収」「実験体のデータ回収」「証拠物件の破壊」が主な任務で、アンブレラがU・B・C・Sを投入したのは監視員の任務を達成するためだ。

そんな感じの捨て駒扱いで大勢の兵士が死んだ  
そしてこのU・B・C・Sを作ったのは、ここにいるセルゲイ・ウラジミール大佐だ！

（またこのような損失及び捨て駒をたくさん作るのか）

そう思ったが

「今回はMs・パープルの要望で作ったんだ、人材も向こうが提供してくれたしな

それに目的は前のような目的じゃ ない！なんでも『日本の自衛隊のように幻想郷を守る軍隊を作つて』と言わされたからな

そうセルゲイが言ったことで安堵したネメシス  
その後セルゲイは、あと、と付け足して

「俺のことは父さんでもパ・パでもかまわんよ」

いろんなことがあった団子屋でセルゲイとパラライと別れて、霧の  
出でいる場所に向かうこととした。

そういうや・・・ネメシスの形態の説明してなかつたよね?といつよ  
りネメシスの説明をするね

### 追跡者（Nemesis）

B・O・W・「タイラント」の性能向上のため、新開発した寄生型  
B・O・W・「NE・」、通称「ネメシス」を寄生させた新型。  
基本性能はタイラントと変わらないが、ネメシスの寄生により知能  
が格段に上昇することで、「より複雑な任務を自己の判断で継続的  
に遂行」「口ケットランチャー等の武器使用」などが可能となつた。  
また、回復能力の向上作用により、タイラントが危機的状況に陥る  
事によつて起くる「暴走」を抑える役目も持つていて。バイオ3で  
は「S・T・A・R・S・の隊員及びその関係者の抹殺」を任務と  
してラクーンシティに投入されており、S・T・A・R・S・の人  
間であるブラッド及びジル、協力者であるカルロスを執拗に追いか  
ける。この任務とネメシスによる知能向上により、「S・T・A・  
R・S・（スターズ）」という言葉を発する。本作に登場するネメ  
シスはNEMESIS-T型である。ジルとの戦闘を経て、3つの  
形態を見せる。

### 第1形態

追跡者の最初の姿。人間を大きく上回る巨体を持つ。全身に防弾・  
対爆仕様の黒いコートを纏つていて、これは暴走を抑えるための  
拘束衣という面も持つていて。コートから露出した部分には、所々  
にネメシスの触手が巡る怪物じみた外見が確認できる。素早く走り  
まわり、突進しながら殴りかかる、ジルの首を絞めた後に投げ捨てる  
といった攻撃を仕掛けてくるが、たまに首を絞めたまま腕から触手を繰り出してくることがある。その硬度は人間の頭部を貫通する

ほどで、これを受けたと即死してしまう。時にはロケットランチャーを携行して現れることがあり、ジルに向けて撃ち込んでくる。また、追跡者の至近距離からロケットランチャーや弾速の遅い銃（グレネードランチャー等）を発射すると、素早く横移動して弾丸を回避することがある。

## 第2形態

激しい戦闘により拘束衣は破れ、繰り返し与えられる肉体のダメージによりネメシス自体が肥大化、半ば暴走状態になりかけている。腕部を縦横に巡っている触手により武器の使用が不可能になり、より激しい攻撃性を示すようになる。即死攻撃が無くなり、攻撃力も第1形態より若干落ちているが、体力は高まっている。右腕から垂れ下がった触手により突いたり掴んで叩き付けたりといった攻撃をしてくるが、第1形態に比べ動作が大振りなので戦いやすい。

## 第3形態

度重なる戦闘と特殊な薬液により限界を超えるダメージを受けたタイランントの肉体とネメシスが、お互いに暴走状態になり肥大化。頭部や手足を失った肉体を異常発達したネメシス本体が補完し、仰向けの状態で四足歩行を行う。腹部からは巨大な肋骨が牙のように突き出し、薬液の毒素により巨大な水疱が浮き上がっている。最早知性を感じさせない外観になりながらも、任務遂行のためジルに迫つてくる姿はまさに「復讐の女神」の名に相応しい。触手による攻撃のほか、体液を飛ばして攻撃してくる。この第3形態はアメリカ軍特殊部隊がラクーンシティに持ち込んだ、「コードネーム「パラケルススの魔剣」」というレールキャノンを使わないと倒せない。

向かってこの連中のお詫び(前書き)

原作キャラクターとござり出でなこ・・・

## 向かって走る途中のお話

T - N - E - M - S - I - S C Side

ネメシスは走る、霧の出でてこるところまで走る

途中いろいろな妖怪といつものに遭遇した

だが歩を止めない

(田標地点まで 後 約 . . . ターゲット表示、. . . )

「スタアアアアアズ！」

とにかく田標まで走る

もしかしてこれが何かの始まりだとすれば . . .

そう考えたネメシスは使命感に襲われた

(絶対に止めてみせるー)

Side out

Ginovaef Side

私は以前、U·B·C·Sに所属していた・・・しかし、そんなにいい物ではなかった

報酬金なども多くて昔は欲に田がくらんだが・・・今はそうじゃない

俺は”ジル・バレンタイン”という女性と話していたら、ラクーンに投下されたネメシスに殺された

多分・・・仲間だと思われたのだろう

そして、死んだ後の私は公開した・・・欲は死を招くのだと・・・

そして私は反省した後に奇跡を体感した・・・そう”奇跡”だ

その”奇跡”で復活した私は、気づいたら地下施設にいた

そこには意外にもセルゲイ大佐もいた

そして、私はセルゲイ大佐に忠誠を誓つことにした

何せ彼も更正したようだからな

そして私はいま、Ms.・パープルが集めたという人材と共に、<sup>セルゲイ</sup>彼の新しい家族の増援として霧の出ているところに向かっている

「二コライ隊長おー、そういうやあのネメシスつて一人で大丈夫ですかねえー」

ふと、昔を思い出していた二コライに一人の兵士が疑問を口にする  
ちなみに、二コライとその兵士は”UH-60ブラックホーク”と  
いう輸送ヘリに乗っている  
そのヘリは全部で4機

他にも、そのヘリの護衛として5機の”アパッチ”という戦闘ヘリ  
も着いてきている

「？それはどういうことかね？」

質問に質問で返すのはなんだけど、この場合は仕方が無い

「いや、ね、ここから霧の出た場所を探つてみたら”紅魔館”と言  
う場所にありつくわけで・・・

そこまで行くのに結構距離があるんですよー」

それに、ともう一人の兵士が割り込んで続けてくる

「とある研究員モンスターが調べて分かつた結果つぽいんですけど・・・周り  
の妖怪フェアリーや妖精が異常になつてゐるそうです」

それを聞いた二口ライは驚き、田を丸くした

そして無線機のマイクを手に取り、こいつ告げた

【総員、警戒を厳にしろ！そして、”死ぬな”】

二口ライは慧音たちの話やMs・パープルが、妖怪とはどんなやつ  
なのか聞いていたのだ

その説明を聞いた二口ライはB・O・Wより恐ろしいといつて  
分かつた

Side out

Soldier Side

現在地点、魔法の森

地上部隊の一人である機関銃士の拓郎を主な視点とする

地上から紅魔郷に向かっている部隊は、ユニットが接続されている  
ブローニングM2・50重機関銃を持つフラットベッドハンバー

とこう装甲車で向かっている

その装甲車は全部で6機

その装甲車に乗っている兵士たちは皆真剣な面持ちで警戒している  
何せ対人戦闘の経験は豊富だったりして意外に経験者揃いなのに相  
手は妖怪という化け物と来た

中には元JSSや元JBCSもいたが、B・O・Wは比じやないだ  
らう

そんなとき、いきなり前のハンバーの速度が上がった

そしてそのハンバーから無線が入った

『一九一・ルタフ・スオーネ・敵襲!・・・7時の・向!』

無線が故障しているのか怒鳴りつけているのか分からないが、途切  
れ途切れな無線をとにかく理解した

「総員! 7時の方向に機関銃構えーい!」

無線で他のやつらに伝えた後に、自分も見てみることにした

そこには氣色悪い甲羅のような胴体を何度もくつつけたような巨大な生き物がいた

それはジェームス・マーカスというおっちゃんの養成所にもいたといつ”大百足”がいた

「総員！速度を上げろ！」

やはり油断ならない敵がいた

魔法の森から

走る、走るーとにかく目標に向かう

そんな時

「お前は食べていいのかー？」

そんな声が聞こえた

だが目標まで向かうように設定されているため、聞こえないも同然  
無視しようとしたが、光の弾のような物を飛ばしてきたため、それを中断して避けた

「食べていいいのかー？」

「プログラム変更、ターゲット”黒い少女”、敵とみなされる行為を行ったため、排除せよ」

「スタアアアアアアズ！」

「そーなのかー？」

謎の返答を返していく黒ずくめ少女に、ネメシスは“ステインガー”を向ける

なにをするのか分からぬ黒い少女はただそれを眺めた

「チエイス タナトスプロフェシー  
追跡『死の予言』」

だがスペル名を唱えたなら話は別だ

少女は咄嗟に身構え・・・ずに、手を十字に広げたまま

「I judge the judgement on fools  
dirtying an ideal of Eden with  
a reputation of the St. Maria  
!」

少女はただ見守るだけ、だがネメシスは冷酷にもステインガーにかける指の力を強くしていく

そして

「Amen!」

Aの掛け声と共にトリガーを引いた

黒い女の子は突然飛んできた弾頭に驚きつつ避けようと横にずれるが

「なんでこんなに大きいのだー？！」

そう、弾頭が予想より大きかつたのである。

そのことで黒い少女の右腕に当たつて破裂する

〔目標の戦意喪失を確認、目標：紅魔館〕

落ちていく黒い少女を放置して目的地に向かうネメシス

Side out

S o l d i e r      s i d e

そう怒鳴りつつも、周りの機関銃の音で搔き消される

魔法の森で遭遇した大百足が物凄く早いのだ、そして硬い

・50の弾がカキンッ...といつ音を出してほと  
んどはじかれる

たまに「ブショウツ！」という音を出して当たる」ともあるがその被弾する場所がなかなか見つけられない

隣から体を出して、”U.S.22-A1”という最新鋭の4連装口ヶツトランチャーを大百足に向いている”ジョン”

そのジョンの掛け声と共に一つの砲筒から一発、他の砲筒からもつ一発と飛んで行き、甲羅に一発当たったのはひびを入れるだけで、他の弾は見事大百足の繫がり田に当たった！

繫がり田に当たった大百足は分裂した

しかし、未だに行動を続けている

「なッ！効いて！」

喋っている最中に繫がり田、いや、割れ田から出てきた液体によりジョンの上半身がジユワーといつ音と共に溶けた

きっと物凄い酸だったのだらつ

ハンバーの床に落とされた武器とジョンの下半身

ジョンの下半身からは血液や、臓器といつた物が出てこなかつた

変わりに溶接でもされたかのように黒く焦げた瘡蓋のようなものが  
あつた

武器もほとんど溶かされていて、使い物になりそうもない

この恐怖を田の辺たりこした拓郎は無線にいつ告げた

『敵は強酸性の液体を放つてくる！繰り返す！強酸性の液体を放つてくる！一刻も早く抜け出すぞ！』

## 向かって立る途中のお話（後書き）

あいつやりじゃ？・・・ビビリじよつか・・・

感想や指摘、アドバイスを頼む・・・

それとネメシスの名前提供も頼む

L e t ‚ s   B a t t l e ! (前書き)

あああ・・・適當ー戦闘描画がいいか悪いかがわからんね！

一体何発撃つただろ？・・・

その後、繫ぎ田にブローニングの弾が当たつたら、簡単に倒せたため、それを無線で知らせて一時終戦になつた・・・

だがあの後にカラス天狗の集団がやつてきて、手に持つてゐる剣や短刀で襲つてきた

無論、ただやられるわけにもいかないので機関銃で応戦する

しかしながら数が多くすぎる

大体8発に一体仕留めるような感じで倒してゐるため弾も結構消耗する

なぜ8発かつて？天狗が早くて狙いが定まらないんだ・・・それにさつきの大百足で一機のハンビーがやられた・・・

地上部隊はもう難しいかもしない・・・

まさか妖怪がここまで強いなんてな・・・

そんな絶望を感じていたら、奇跡が起きた

『恋符「マスタースパーク」！』

掛け声の後に巨大な、かの”バラケルススの魔剣”のような太いビームが上空を占めていた

Side out

Ginovaef side

「隊長！」

現地点：霧の湖

突然さつき話しかけてきた兵士が声を荒げて呼んできた

「どうした?...」

「無数の妖精<sup>フェアリー</sup>と妖怪<sup>モンスター</sup>の集団です...」

「なんだと?...」

ヘリのコックピット・・・ガラスの向こうには無数の妖精たちが飛んでいた

そしてなにやら小さい光が・・・

『ツー! 総員避けるツー!』

無数のこの世界の”弾幕”といつものが飛んできた、それはヘリが当たれば容易に墜落するだらう

『全アパツチ操縦者に告ぐ! 戦闘に入れ!』

この場合は戦闘態勢に入れないとそのまま戦うしかない

「ついで空中戦も繰り広げられる」となった

まず、アパッチが妖精のまとまっているところにミサイルをぶつ放す

そして機関銃を撃ちまくる

ブラックホークは内装されている機関銃で応戦したり、兵士が身を乗り出して狙撃したりしている

「いけええええ……！」

大方の兵士はそう叫んだ

そしてそのへりとへりの間を、紅と白の衣装に身を包んだ少女が飛んで行きました

『夢符「封魔陣」！』

その声の後に、妖精や妖怪が消えた……

T · N · E · M · S · I · S      Side

しばらく走つていると紅い霧が濃くなつていつて、紅い館が見えてきた

そして今まで無視して突破してきた妖精なども強くなつてきていた  
そうなつたら無視するわけにもいかないのでM134で蹴散らして  
いった

そして館の門と思わしき場所に到着する

「ちよつと待けなさい!」

そつとつて攻撃を仕掛けてきた、チャイナドレス・・・以後”中国”

「私は二二〇の門番よー！」を通りたかったら私を倒してから行きなさいー！」

「中国は言つてきた、無論、邪魔をする場合は

「目標の侵害、ターゲット変更、”中国”、抹消」

「チャイ二イイイイイイイイズツー！」

「ちょっとーなんで私だけそんな雄叫びなのよー！」

・・・二で知つたか知らないが、その件について物凄く怒つている

とりあえずスティングガーを向けて発射する

「ツー危ないわね！」

中国が避けた後に門が爆発した、リーチとスピードで負けたのだろう  
中国は弾頭をすばやく避けて、すぐ背後にあつた門のせいで誘爆に  
失敗

仕方ないのでM134に持ち替えて乱射しまくる

「ウラオオオオオオオオオオ……！」

勢いよく弾が出るわけだがほとんどが外れて壁に穴を開けていく

そんな流れ弾のうち一つが館の窓に向かっていた

ネメシスはその窓にある“者”を見つけた

咄嗟に危ない！と思つたが、弾が突然はじけた

窓を割らずにだ

そんなことを田の間たりにして呆然と立つ頃へしてしまつたネメシス

「余所見とはずいぶんと余裕です！ねッ！」

「ガツ！」と腹に一発蹴りをお見舞いされて、腕、脚と順番に攻撃されていった

中国は近距離戦闘が得意なようだ、そして脚が早いがために距離を置けない

「アサシン『ファンタジース』  
暗殺『幻想追跡』」

これを唱えた後に、腕の中にある棘が動き出した

これに気が付かない中国

今度は顔面に蹴りを入れようとしてきた脚をつかみ、その腕の棘を脚に突き刺す

「ツー！」

半径5センチもある棘を脚に刺されて驚きつつも、背後に交代する中国

そこにもまた棘を伸ばす

それに驚いてまた避けようとしたが、片方の足の怪我で少し遅れてしまつ

「あツー！」

幸い避け切れたものの、肩に棘がかすつてしまつた

それで倒れてしまったところに、もう片方の棘を伸ばす

そして中国の腹を貫通させた

「うぐッ！」

幸いにも彼女は妖怪だったわけで、戦意を喪失したため、ネメシスはまた紅魔館に向かうことにした

## Let's Battle ! (後書き)

・・・よくわからんね・・・博靈と白黒の普通の魔法使いさんを次に  
は出せるよつておへよ・・・

つてかネメシス冷酷化してる気がする・・・なんていうか、虐殺?  
それに兵士たちもと・・・紅い霧異変を解決しに来たのに殺つちゃ  
あかんでしょ w

(外話) 妖怪の山・・・天魔の家にて(前書き)

天狗が来た経緯を語ります

ちなみにこの時つて確か柵、及び、文はいなかつたはず・・・

(外話) 妖怪の山・・・天魔の家にて

### 妖怪の山

その中に一際大きな家がある・・・簡単に言えば屋敷、武家屋敷だ

その縁側に歩いている4本の羽を持つ”天魔”

ちなみに今の時間帯はネメシスが紅魔館に向かつたあたり・・・

今日も天魔はいろいろな報告書の整理をしなくてはならない・・・

（あ”一めんどうだー）

内心ではそう叫んでいる天魔だが

「天魔様、よろしくお願いたします。」

「ふむ、わかつた」

さすがに部下たちの前ではカリスマを發揮する

そんな時

「おや?・・・おめーさん、今何刻かね?」

天魔は後ろについている部下に今何時か聞いてみた

「今ですか?・・・はて、確か辰の刻でしたね、それがどうかなさいましたか?」

辰の刻とは、現代で言う4時で、まだ午後、つまりはまだ暗くなる

には早やあれる時刻

「じゅあよ、お前わんはあの空を見てどうゆうよ

「あの空とは……これは異変ではありますんかッ！」

「だらうみ

部下が慌ててるのに、天魔はなぜか落ち着いてる……いや、微妙に息が荒い

（よつしゃーこれでちゅうと休めるー）

天魔はがんばつて嬉しいのを堪えていたのだ

妖怪の山にある、駐屯所

「ヤーッ！」

今度は天狗の”天さん”に密着！

天さんは、現在組み手で50戦中40連勝のサイキヨーさんだ

「緊急事態だ！総員装備を整えろー！」

そんな中で、上層部に所属するお偉いさんが慌てた様子で入って来た

(異変?)

最初は疑問に思っていたが、自分は強いと思っていた天さんは、余裕を見せながら装備を整えに行つた

そしてみんなが装備を整え終わつた後に、駐屯所の門に集まつた

そして上層部のお偉いさんがいつ言った

「これより一異変解決に向かう！」の異変に向かつた彼らの名は語り継がれるだろ？！だが、犠牲もやむをえない・・・みんなのもの！心してかれ！」

『オオー！！』

上層部の語りかけの終わりに、みんなして威勢の良い声を上げた

「では、ゆけー！」

その声と同時に

ある者は怯えながら、ある者は支えながら、ある者は真剣な面持ちで向かいながら、また、ある者は

余裕な状態で向かいながら

そして、天狗は二つに分担された、魔法の森から行く者と、霧の湖で行く者で意見が分かれたからだ

天さんは、魔法の森から行くことになった

そして天さんの表情から余裕が消えた、向かっている途中で大百足の死骸がそこらじゅうに転がっていたからだ

大百足は決して弱くない・・・逆に強い方だ

そして、その大百足を倒した”奴ら”に遭遇した

最初は天さんも分からなかつた、”奴ら”の持つていた筒の先から火が出るたびに近くの天狗が落ちていったからだ

そして、次第に自分たちを倒してくる敵だということを理解して、交戦に入った

(外話) 妖怪の山・・・天魔の家にて(後書き)

・・・うまくかけない・・・

まとめ

ネメシスが紅魔館に向かつてある程度経つた頃に天魔が異変に気づく  
それから少し経つた後に、駐屯所で説明や演説が行われ、天狗たち  
が紅魔館に向かつた

そして魔法の森を進んでいる時にU・B・C・S地上部隊に遭遇す  
る、そして交戦に

こんな感じ・・・まあこの場合は、天狗が行くのがもうちょい早け  
れば交戦に入らなくて済んだのかも・・・大百足を一緒に撃退して  
いたかもだからねwww

ま、先に手を出したU・B・C・Sのせいなのに・・・天狗さん方・  
・・・」愁傷様

突撃！紅魔の異変を…あと“G”（前書き）

・・・ サーセンへ  
つてかいい加減名前打ち込むの面倒だ・・・ 誰か名前提供して（ネ  
メシスに）

突撃！紅魔の異変さんーあと”G”

T · N · E · M · S · I · S

門番を倒して破壊された門を抜けると、紅に染められた館が見えた

「悪趣味だなあ」

目的地に到達したネメシスは、新しい目標を探すべく、探索

(ナハニヤ・・・)

ふと、やつきの”者”を思い出す

金髪で赤ん坊の頭につけるような帽子をかぶつていで、背中に七色の宝石のついた羽を持っていた。

そして、手を窓の方にかざして・・・弾を碎いた

その謎の事にネメシスは考え込む、しかしあれが能力だとすると、例えば”破壊する程度の能力”ならば、はつきり言つて脅威でしかない。

そこまで考えたネメシスは目標ターゲットを決めた

「ターゲット、七色の羽を持つ少女、目標表示、」

「スタアアアアアアズ！」

Side out

Soldier

Side

はつまうと言つて、むけやへけやだ。

「弾幕はパワーだぜ！」

我らが地上部隊は、白黒魔法使いに先導してもらつていたのだが、ほとんどの敵が来ない。

ところより魔法使いがほとんど前に出る敵を倒しきつている

妖精などは出た瞬間に”弾幕”で倒し、集団で来てもすぐ倒すわざのよつなビームは出れないが、強すぎる

そのおかげで被害はハンマー一個と一人で済んでいる（「向かっていの途中のお話」参考）

弾薬も消費しなくて済むので、まかせつきてにしてこの

これなら後もう少しで合流できそうだ。

でもこの魔法使いの戦闘は無茶苦茶だ

おかしい・・・ここの人間は人外（B・O・W）をも勝るというのか？

さつきから紅白の少女が針やら紙だけで妖精や妖怪フェアリー モンスターを倒している

「ハアアツ！」

時には格闘もするが、一方的すぎる

やつぱりどこの世界でも女性といつもの強いものだな

それに、彼女のおかげでこちらも助かっている。

さつせと大佐の息子殿に合流しなくてはな。

Side out

T · N · E · M · S · I · S Side

しばらく館に入っていると探してみたけど見つからない。

情報不足とネメシスは思っていたが、そつぽい

ただ”見た”だけであつてそれ以外の情報は何も無い  
と言ひわけでネメシスは結構探すのに苦労している

(ビード、ビードルのー)

昔はよく『廊下は走ってはいけません!』と先生によく言われたものだったが、走らなければ一向に  
辿り着けない

そうやつて走つていつたら、グニャツーと何かを踏んづけてしまった。

途中で走るのをやめて振り返つてみると、そこには、”G”の成体  
がいた。

追加で潰れた”G”の幼体も

〔目標追加、G成体の駆除〕

「グウウウウ・・・」

唸つているG成体

そのG成体に突撃していくネメシス。

ネメシスにも”Gウイルス”というのは入ってはいる・・・自分を除いて

Gウイルスというのは、アークレイの森だったか山にある洋館にいた、リサトレヴァーから発見されたものだ。

発見者は、Gウイルスの作成者である”ウイリアム・バーキン”だしかし、Gウイルスは”ハンク”という工作員が奪つたもの以外はラクーンで処分（破壊）されたはずだ。

（Gはもう存在していないはず・・・）

なぜか少しバイオ知識があつたネメシスはそこに気がついた

ハンクが奪つたGウイルスは処分されたはず・・・といふことに

（なぜここにあれ・・・あの白衣の研究員って、まさかウイリアムか！？）

しかし、ウイリアムがいれば話は別だ、あいつの血でまた作り出すことができる

それに、目の前の”G”も少し違っていた

腫れぼつたい半目のために、長くて太い首、爬虫類と人間が合わさったような胴体、長い尻尾それに付け加えて頭に”角”や体の外側のほとんどに”棘”がついている。

そして”G”特有の大きな”目”が腹に付いている。

（厄介だ、もう進化しかけていたか）

館の廊下で、突然風を切った音が聞こえた、そしてその後に鈍い音が聞こえた。

「グフツ！」

「グゥウウウ・・・」

いまだに”G”は唸つていたが、ネメシスは壁に叩きつけられていた。

長い間考え方をしていたので先手をとられたようだ

すぐさまネメシスは立ち上がり、M134ミニガンを”G”めがけて乱射した。

しかし、Gは大穴を空けられたり、腕を落とされても、また”再生”する。

落ちた腕からは、幼体も、うじやうじや出てくる。

ふとネメシスは思った

(ここがいい、うまいのか?)

思い立つたらやってみるが吉、早速飛んできたGの幼体をつかんで握りつぶし、口にふくむ

意外にも、刺身のような味覚で感じ取れたGの幼体の肉は、ネメシスの腹に欲求を求めさせるハメになった

そして、次々と飛び掛つてくる幼体を握りつぶしては食べ、握りつぶしては食べ・・・

残るは成体だけとなつた。

「俺の腹を満たさしてくれよ?」

「グウウウウウ・・・ウウ・・・ウオオオオオ!――!――!――!」

突然叫びだして突進していくGの成体

その突進を避けて、片手で首を掴む、そしてもう片方の手で首を殴

りまくつて、時に膝で腹の目を蹴る

それを繰り返していたら、Gが動かなくなつた。  
そして肉を試食してみる・・・

「弾力性のある刺身つてのも、捨てたもんぢやないな

満足感に浸つた

完食した時に、脳裏に言葉が表示された

〔Gを捕食、Gウィルスを確保、再生力が30上昇〕

（これは、普通のネメシスを上回れたのかな？）

確實に再生力のレベルが上昇したネメシスだった

（これなら部位を破壊されても大丈夫だな！早速探しに行く！！）

「スタアアアアズ！」

こうして、また廊下を走るネメシス

Side out

? ? ? side

「ツチ、アンブレラのクズがツー私のペットを食いやがつてツ！」

ネメシスが去った後

Gの残骸に近づく白衣の男がいた。それに

「ウィル、仕方が無いさ・・・また別の機会を狙おう

「・・・そうだな、アル」

サングラスをかけた白衣の男もいた。

突撃！紅魔の異変さんーあと”G”（後書き）

金髪タモリをヒーヒョーさせてみた。

だつて5で確実に死んでるしwww

まあ、悪役しか出してないねwバイオ組はwww

理解できなかつた場面があつた場合や、ネメシスの名前を思いついてくれた方

はたまたアドバイス、指摘、新しいスペルを思いついた方は、感想に書いてください・・・では^\_^

到着した増援、それと狂い（前書き）

・・・つこひこ・B・C・Sが紅魔館にINした。・・・よー。W

## 到着した増援、それと狂い

G i n o v a e f f S i d e

霧の湖を抜けた上空、そしてそこから数キロ進んだ先に目的地、および合流地があつた

そこへ、ある程度の隊員がラペリング降下をしていく・・・そして最後に一ロットライが降りる

そこには地上部隊も常に来ていたようで、なにやら虹黒魔法使いに助けてもらつたとか。

そして気づけば自分たちを助けてくれた紅白の少女も消えていた。

仕方ないのでその辺は無視して、一ロットライは無線を手に取る

『総員、準備が整い次第、突撃せよ！尚、デルタ2（一ロットライと来た部隊）は残つてもらつーそしてアパッチ部隊は空からの援護などを頼む・・・以上！』

そして、そそくさと準備をして、突撃するC・B・C・S

しかし、皆真剣な表情で、その表情だけで蛙おも殺せるんじゃないか？と思えるくらいだ。

もはや先ほどの戦闘で皆分かつたのだろう、”敵は尋常じやなく強  
い”

それで隙を見せないように団体で突入していった。

尚、誰一人として表情の違うやつはいなかつた

一人のミスが全体へと影響して、死者は免れない・・・いや、”死  
者が出る戦闘だからこそ真剣”なのだろう

ちなみに、デルタ2を残したのは指揮官を養成するためだ、いくら  
なんでも指揮官が私だけつてのは厳しい。

『・・・・・アールファ・t w o、目標地点に到達、なにやら交戦模様、  
どうぞ』

『・・・・・ルタ・t h r e e、血痕を発見した、サンプルを採取す  
る』

『こちらデルタ・o n e、なにかの生き物の残骸を発見した、資料と  
して写真を撮つておく』

(フム、いろいろあるようだな・・・だが、なにかの生き物の残骸  
? これは楽しみだ)

そしてデルタ2の兵士たちが返答を返す中、興味深い無線を聞いた

『・・・らアルファ tw0! 至急増援を頼む! くりかえ s 『アハハハハ! や、やめろ! こっちに来るなツ・・・来るなつたら! 『皆、壊れないでね?』 ヒ、ヒィイイ! ・・グアアアアアアアア! ・・』

アルファ  $t_{wo}$  の戦力は、今回増援として出した中でも室内戦（CQB）に優れている部隊だった。

やはりここは悔れないな・・・

Side out

Takuro  
Side

『・・・らアルファ t w o ！至急増援を頼む！くりかえ s 『アハハハハ！－！』や、やめろ！こっちに来るなッ・・・来るなつたら－』『既、壊れないでね？』ヒ、ヒイイイイ・・・グアアアアアアアアアア－！－！－！

拓郎たちや、他のチームもこの無線を聞いたときに、動けないでいた・・・いや、恐怖で硬直していた

無線の中に聞こえた少女と思わしき声、銃声、ひどく怯えていた拳一句、殺された時の断末魔がこの短い時間で無線から響いて来たのだ。

U・B・C・Sの誰もが唾を飲み込んだ、”次は俺かもしれない”といつ恐怖と共に

なぜなら、兵士の室内戦闘(CQB)訓練で優れていたAlpha Team2分隊がものの数秒で瞬殺だ、そう、”瞬殺”

兵士たちは、恐怖と戦いながらも探索を続けた。

T - N - E - O - H - C - E

走り続けて、地下へと続く階段を下りて、とある部屋の前に来た時のこと

やけにその部屋が騒がしい

それでは、端屋のジアもすぐ壊れている。

ネメシスは、すこしへりの方に寄りかかって、中の音を聞いてみると

「アハハハハハ！禁忌『フォーオブアカインド』」

「衛生兵！衛生兵！ディランが重症を負っている！」

「ウアア・・・・クソウ・・・・もう・・・・駄目だ・・・・」

（もの凄い交戦状態だな・・・しかし、一体どうなつているんだ？）

ものすぐ中を見たいという衝動に駆られてしまつたネメシス

（）「へこりとまつて、そーつとスキマを作つて覗くんだよな？」

仕方なしに、わずか薄さ1・5ミリの隙間を作つて覗いてみると

「オニちゃん、覗きは犯罪ですよ～？」

「ツ！」

思わず後ろに飛び退いてしまつた。

だがその選択は間違えていなかつたようだ

突然さっきまでのドアが消し飛んだ、そう、”消し飛んだ”のだ

「アハハハハ！鬼さんは壊レナイヨネ？」

そう言つと共に、やつまで後ろにいた3人もやって來た。

一瞬だが、部屋の中を見ることができた、そこには悲惨な光景が広がっていた。

部屋には血の池が溜まつており、ある兵士は上半身と下半身が泣き分かれしていて、ある兵士は頭が無い、ほとんどの兵士は5体満足ではなく、しかもグチャグチャだ

「こっくよー！『禁忌』レーガー・テイン』『

少女がそう言つて、ビロからか槍を出してじつに突撃してきた

「目標判別、確認、Name『Flandor skaiilr  
ets』危険レベル、高】

「スタアアアアアズ！」

対する”オニさん”は、金棒のようなスティングガーと、M134ミニガンを一気に掃射した。

## 到着した増援、それと狂い（後書き）

・・・うまく書けない

ちなみに紅白巫女は、咲夜戦  
白黒魔法使いは、パツチエ戦  
という設定  
だよw

そして未だにU・B・C・Sと遭遇してないwww

最初に無線出したチームが先に死ぬ設定とかでよかつたのかな？

前回言つたよ、ついで

質問、アドバイス、新スペル、ネメシスの名前などをジャン＝ジャン！募集中！

・・・ほんとに頼みます・・・ハイ

## 設定集、U・B・C・Sの装備類（前書き）

えつとね・・・まあアンブレラ私有軍の装備だよー

あとね、U・B・C・Sってホントは囚人の軍隊なんだけど

こいつの場合は違うよ・・・タブン

## 設定集、U・B・C・Sの装備類

### 衣類

戦術的な、危険な、そして戦闘活動への関与、U B C Sの工作員による軍並みの戦術的なギアを着用し、使用している。

皆共通で、黒い戦闘ブーツ、ベージュ色の作業用ズボン、緑色の作業用シャツ、そして背面に刻印されているU B C Sの紋章を持つ耐荷重チヨツキのいくつかのフォームを着ている。

彼らは、ベストに組み込まれているクロスドロー・ホルスターを使用して、ドロップフレッグホルスター、などで、ピストルを運ぶ。

### 兵器

種類は、ピストル、自動小銃、精密ライフルと様々な爆発物を含む

#### 小型武器

ユーティリティの標準的なライフルはM 4 A 1のアクセサリなし

公式のサイドスロー（サブマリウェポン）はSIGプロSP200

9、あとは、SIGイーグル6・05

高性能爆薬手榴弾が発行され、そして特にミハイルとタイルバトルックによって使用された重火器については、各小隊は、いくつかの使い捨てのAT - 4対戦車ロケットランチャーが装備されていました。

U B C Sのメンバーが装備してゐる、ヘッケラー&コッホM P 5サブマシンガンは、ラクーンで密かに作られたタナトスに効くようさがれている。

「G R A Y G i n o v a e fがに接続されてゐる特殊なランチャー使用のヘッケラー&コッホP S G - 1は、タイラントの血液サンプルを取ることが目的で、ライフル自体を実際に解雇されることはありませんでした。

生物兵器を探す使命を帶びてゐるU B C Sユニットのニュクスはまた、M P 5機関銃で武装してゐた。

別の手術、アーノルドは、同様にP S G - 1を使用して見られた。

ユニットにいたクラウスが使用する武器（クラウスが使用するM 4カービンチームは、デルタ小隊が使用する標準的な武器と類似していた）は、M 20 3のグレネードランチャー・シングルと一緒に、バレルの下にマウントされているベネリM 3の散弾銃がついている。

彼らの任務を通して、ユニットが接続されているブローニングM 2 . 5 0 重機関銃を持つフラットベッドハンバーに乗つた。クラウス（チームのほとんどがバイオ3のハザード地域内、U B C Sのメンバーと同じS I GのS P 2 0 0 9 sを実施しながら、クラウスは、追加のS I G P 2 2 5を行つた。）

ユニットは、バイオハザードエアポカリップスがその後、特殊部隊ゲームの傭兵の多くとして描かれ、彼らが装備してゐる武器の種類がより多様になり、彼らのより多くの質素な対応を取り入れた。

彼らの主武器はIMI Tavor CTAR - 21と

IMIマイクロガリルアサルトライフルです。

彼らのサイドアームは様々で、デザートトイーグルとベレッタ92F

Sを使っていた。

彼らは、M67の断片化手榴弾以外の任意の爆発的な武器を携帯していました。

・・・以上！！ ×hankuめり

## 設定集、U・B・C・Sの装備類（後書き）

いやー・・・無理してイギリスだったかアメリカのサイトを通訳して書くものじゃあなかつたね・・・

なにか、わかんないことがあつたらいつてくべきでいいへへ

(外話) 風のような存在のセルゲイは・・・ (前書き)

えーっとね・・・ これは今まで出てなかつたセルゲイの、行動の  
お話です

とこつか口コで書いておけば、あた・・・なんでもないwww^~;

(外話) 風のよつたな存在のセルゲイは・・・・

場所的に言えば、博麗神社と人里の間にある森の中

S e l g e y   S i d e

「グスツ・・・私は・・・私は威儀が足りなかつたのだろうか・・・

」

とある森の中で、いい年こいて体育座りしながら花に話しかけている大佐

「確かに、もうカリスマなどは必要ないと投げ捨て、今までのことを有効活用してキャラを変えようと思ったのだが、駄目だったのだろうか?」

花に疑問を投げかけたけど、当たり前のことながら、返答が来ない

「父上ーー・ビニですかー?父ヒ・・・え?」

そんなときに、新しく作った新イワンがやつてきた

e?

セルゲイが自分に気づいたため、イワンは迷わず回れ右をし始める。

そんなことを聞いてくれることも無く、走り去ってしまったイワン

「くそつ・・・」いつなつたのも全部”あの霧”のせいだ！霧め！覚悟しろ！」

そう言つて、自分たちの新しい住処、”傘無しの郷”へと向かつて  
いつた

i w a n      S i d e

はつきり言つて、関わりたくなかつた

ただそれだけなのに何かを勘違いしている父上がいる。

面白そうちから着いて行くこととした

S i d e   o u t

S e l g a y      S i d e

ナイフヌーし！モーゼルヌーし！アフトマートヌーし！父親心ヌー  
し！カリスマヌーし！

そんな掛け声が合いそうな感じで装備を整えたセルゲイは、近くに  
あつたジープに乗り込んだ

「これで霧の出所にむかってやる！待つてうよ！我が息子よ。」

そしてエンジンを掛けたとき、少しへジープが傾いた。

「父上、弟を助けに行くのに俺らをおこしてつちや兄貴になれません  
ぜ」

さつき逃げていったイワンが助手席に座つて叫びてきた

「いや、あれはお

「父殿、せつしゃたちを連れて行くので、じゃねー。」

今度は後ろに乗ったイワンに言われた

「・・・じゃあ行くか！」

あたかも何もなかったように、そして、家族でドライブに行くかの  
ように叫びて、ジープを走らせた。

(外話) 風のような存在のセルゲイは・・・・ (後書き)

・  
・  
・  
説明？

セルゲイはネメシスに無視をされて落ち込んでいて、花と対談  
そこにイワン登場、セルゲイが気づくと共に逃亡

セルゲイは全てを紅い霧のせいにする

八つ当たりする気満々な状態で支度をしたセルゲイは車に乗る

イワン×2と一緒に紅魔館へ！

こんな感じ？ちなみに、キャラ崩壊とカテゴリに入れてあるため、ご了承ください

Flandre Scarlet なんなく鬼畜な妹（前書き）

戦闘描画がムズかし過ぎて、なかなか思いつかず、書けても訂正したりの繰り返し

「アハハー！オニさん凄いねー！」

そう言いつつもフランは4人での連携プレイを使つてくる

「・・・ツ」

連携プレイのせいで、なかなか武器を使えないでいるネメシス

そんな時、ふとした拍子にフランたちに隙ができた。

「ウオオオオオオオオオオ！－！－！－！」

その隙を利用して、M134ガトリングを撃ちまくる

「ウグツ！」

「ガツ！」

そのガトリングの弾幕に被弾した分身は、次々に消えていった・・・  
のだが

「クツ・・・フフフ・・・アハハハハハ！－！」

本体は、効いている様子がない

そして、ネメ시스にレー・ヴァテインに向けて、突撃してきた

「グツ！」

そのレー・ヴァテインは、ネメ시스の拘束具こと、防弾コートを貫通した。

「アハハハハあ！まだ生きてるんだねえ、オニさん面白いー！」

（グツ！痛い、この槍はなんて代物なんだ！）

「アハハハハハあ！まだ生きてるんだねえ、オーラン面白い！」

ネメシスは、この槍が神器のせいか、なにかしらのせいで再生ができないでいた。

「ウグツ！あ・・・アアアアアアア！－！－！」

突然雄たけびを上げたネメシス。

すると、防弾コートがじょじょに裂かれて行って、その後にたくさんの触手が生えてきた。

これは、ネメシスの”第一形態”である

（意識が・・・）

ここから、ネメシスは正氣を失った

Side out

Flandre Side

「ウグッ…あ…アアアアアアア…！」

突然ネメシスが叫びだし、じょじょにロングコートが剥がれていった光景を目にしたフラン

そして、剥がれていったロングコートの下にあつた触手を見て、少し寒気を覚えた。

(な、なんで? こんなのどじが怖いの?)

その触手の気味の悪さなどに恐怖してゐることに気がつかず、しかも少しずつ元に戻つてゐる事にも気づいていない。フラン

「ウー・・・ウオオオオオオオオ！・！・！・！」

ネメシスが雄たけびを上げて、恐怖で硬直しているとき、壊れたドアの方から複数の足音が聞こえた

side out

紅魔館を探索していたら、何やら安全地帯と油わしき雰囲気を放つ  
ている部屋が一個。

試しに入つてみた拓郎たち、そこにいたの？・・・

「あ～う～

「（ぬ、ぬ、ぬ、ぬ）グッ・・・

「なにやつてんの？あなたたちも・・・

うなだれる少女、鼻を押えてこるメイド、呆れてこる巫女、そして  
もう一つ箇所では

「本を返しなさい・・・

「死ぬまで借りるだけだぜー・・・

なにやら口論している女性と魔法使

いの存在に気づけないほど、のんびりしてこらして

と、『なら、俺も行つてみよつぜ？・・・』と、何やら興奮気味な  
隊員が部屋に一步踏み出した。

「ツー」

部屋に一步踏み入れた瞬間に、メイドの姿が一瞬ブレて、隊員の背後に回り、首にナイフを突きつけていた。

「え？・・・ツー動くな！」

一瞬呆気にとられていた隊長も、すぐに正气回ってM4カービンを突きつける。

しかし、そのカービンも、突然出てきた光で吹き飛ばされる。

「そつちこそ動くなだゼ！」

隊長も呆気なく拘束されてしまった。

「後ろの4人もう『ウオオオオオオオオオオオオ！－！－！－！』なんだ？！」

突然の雄たけび・・・しかもコレはネメシスの雄たけびだった。

(これは、報告か)

拓郎は無線機に手を伸ばし、通信を試みようとしたが

突然現れた光で、無線機を破壊される。

「なッ！ なんて」とをしてくれたんだ！」

突然のことと、思わず叫んでしまった拓郎

「動くなつて言つたぜ？」

魔法使いがドヤ顔で言つてくる。

「（仕方ない、か）隊長！我々は先に息子殿の増援に行つてきます！」

隊長の悲痛な声を無視して、残った4人の部隊で雄たけびのあつた方に向かう。

「そつ勝手につづかせるとでも？」

廊下の先に現れたメイド・・・さつき部屋で隊員一人を拘束してい  
たはずだ、なぜここにも？

「私は『時間を操る程度の能力』を持っているので、容易い」とで  
す。」

(これは厄介なのに遭遇した)

そう思うがなんとやら、またも雄たけびが響いた。

「！」の雄たけびの出所は・・・まさかー妹様のところ？！

その話を聞いて、妹様とはどんな人かを聞いた。

そして、人ではなく、精神状態が異常だと言うことを聞いた。

「これじゃあ息子殿がヤバイ！無線が故障した今、もしも”第一形  
態”に入ったときの対処が分からない」

こんなたくさん疑惑を抱いていたら、隊員の一人に打ち砕かれた。

「ネメシスは再生力も高くて耐久力も高いから、倒しちゃえればいい

のです？」

とりあえず、雄たけびの出た地点に向かう

その部屋のドアは無くなつており、無残に荒らされたような感じだつた。血の海と肉塊の残骸があつたから

そして、その部屋にいたのは、”第一形態”のネメシスと、怯えている幼女だった。

うーん・・・なんでこんな難しいんだ？ｗ

まあ、次はネメシス戦になっちゃったｗｗｗ

フランは、勝手に正気になさせてしまいました。

恐怖で能力を制御できるようになるとか・・・トライアフリカ発生かあ・・・

## ちょっとしたお知りせへ的なの

えーっと……

一 心逃げるよつた事言います、まずはじめに、スマッシュ

このような駄文をお気に入り登録している方には、なんでおれを言つていいか……

それに評価をしてくれた皆さんにも……

・・・とつあえず、本題に入ります。

実は、俺の書いている文を、他の誰さんの小説読んでから

試しに読んでみたら・・・

欠点が多すぎました。

とつあえずはある程度修正して、つて行きたいんですけど

なんかU・B・C・S隊員が第一の主役化しちゃつてるんですけど  
I・O・R・Z

そ・し・で、新しくも一つ作つて、それに隊員の話を書いつと想  
うのですが・・・どうでしょ？

・・・ハイ、いきなり初心者であり駄文作者がこんなことを書くの

は生意氣であったのは理解しています。

しかし、一種の娛樂として書いてるので、できるだけ良いものを書きたいんです。

できれば、『協力下さい。

・・・アンケート方式で問います。

ちよつとしたお知らせへの（後書き）

- 1・このまま続けていく
- 2・U B C S隊員は別にする
- 3・目障りだから消えてもらつ

## U 戰闘（前書き）

久々に更新・・・なぜか思いつくのは紅魔の後  
そしてなぜか2つにルートが別れる・・・

どうしょ・・・次の異変まで幻想郷かラクーンかそれともビコかの  
生物災害区か・・・

ま、いいや・・・ここで兵士に名前付けよつ・・・どうせ死んじゃ  
うんだしさー? ?

ちなみに拓郎は兵士サイドでの主役だから死なない・・・アメコミ  
みたいに

隊長：デネブ（捕虜化）

- 1：拓郎
- 2：ガルヴ
- 3：ノルヴァ
- 4：健斗（捕虜化）
- 5：ホーク

・・・この話で使わせてもらひ兵士の名前だよ・・・多分どれか  
死ぬ

「總員散開ツ！ヤツを惑わせろツ！」

ノルヴァの声が部屋に響く

その言葉に、ガルヴとホークがネメシスの後ろに回り込んだ、ノルヴァは威嚇射撃をしていた。

ネメシスは囮まれたことに最初は戸惑ったが場所は狭い地下室で、相手は銃身の長い室内では不利な突撃銃

ネメシスは触手を伸ばし、振り回した。

「ウガツ！」

「ウボア！」

「アガツ！」

その触手が時には銃身にぶつかって弾を逸らせ、味方にあたつたり時には人に当たつて吹き飛ばしたりした。

そして、拓郎以外は皆戦闘不能になつた。

それでも尚触手は振り回された。

「ジー」

そのうちの一つが拓郎へと先端を向けて、いまにも貫いつとしていた。

takuro side

「ジー」

明らかに積んだ。

もうこれ以上は無理だ・・・そつ思つた拓郎は、

(せめて最後は・・・いや、死ぬまでやつてやるジー)

少し下がっていた銃口を上げて、ネメシスの頭へと向けて、乱射した。

「アホなやつらが何をやっているんだ？」

火事場の底力で反動を最小限に抑え、ネメシスの頭を狙つた。

カービンの弾はネメシスの頭へと吸い込まれるように当たっていき、怯ませた。

その怯んのだ瞬間に、拓郎の頬が緩んだ

そして、3・4発撃つたあとにネメシスは倒れた。

「・・・は、ハハハ・・・アアハハハハハハ！－！どうだツ－－！－思  
知つたか化け物がツ－！」

そして、ネメシスへと近づいていき、カービンの銃口をネメシスの頭へと近づけ、撃った。

しかし、弾は1発しか出なかつた。

30発しか装填されていないのに、あれだけ撃ちまくつたから当然のことである。

ネメシスは、弾切れなのが分かったのか、ゆっくりと立ち上がった。

「なツ！」

拓郎は後退しながら、マガジンポーチからマガジンを取り出し、リードを試みた。

「クソツ！入れ！入れってんだよツ！」

しかし。恐怖と焦りのあまり、なかなか填めることができない。

ついに、壁際まで追い詰められた。

壁に背中がくつついたことで、尚恐怖が倍増したが、背中は大丈夫だといつことが分かつて少し落ち着きを取り戻し、マガジンを填めてリードをした。

しかし、その時にはネメシスがすぐ近くに迫っていた。

拓郎は腰だめで銃口をネメシスへと向け、希望と共に5・56mの鉄の弾を撃ち放った。

希望を込めて撃つた。

だが、現実はその希望を見なかつたかのように捨て去つてくれた。

ずっと鳴っていた銃声は消え、銃口からは熱で煙が立ち上り、空の薬莢が地面に落ちる音が地下室に響いた。

『ウオオオオオオオオオオオツ！！』

ネメシスは、けたたましい雄叫びを上げ、歩いてきた。

その姿はまるで悪魔の如く恐ろしかつた。

拓郎は、最後の最後でも諦めないように、腰の手榴弾へと手を伸ばした。

ネメシスは拓郎の目の前で止まると、右手を振り上げた。

その振り上げた瞬間、拓郎は腰の手榴弾をポケットから抜き取り、  
ピンも一緒に抜いた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

紅魔館の地下室から、人間の雄叫びと追跡者の雄叫びがひびき響きわたり、その後に爆音が館内に響き渡った。

□ 戰闘（後書き）

やべ、少なかつた。

・・・ネメシスが本領を発揮していない気がする・・・

ま、いいや、とつあえずいつかアンケートをやってみよ。

・・・いい加減紅魔郷終わらせるか・・・東方キャラほとんど活躍してなかつたし・・・短いけど強制終了する。

「危なかつたですね」

煙のたちこむる部屋から聞こえる声

煙が晴れたときに見えた光景は、相変わらずの惨劇の跡と一人のメイド

「・・・」

メイドは銀髪蒼眼で整った顔立ちだ

そして驚いたことに、拓郎を抱えていた。

屈強な兵士である拓郎を、まだ20近くの女性が抱えているのだ

そしてその女性は拓郎を抱いで部屋を出ようとした

（シユウ）

（ザシユウ）

ネメシスの触手が飛んできたのに、突然どこから出てきたナイフ

により防がれる。

「ザ・ワールド」

女性がそう言った瞬間、女性と拓郎の姿がブレて・・・消えた

文字通り”消えた”のだ。

部屋に残されたネメシスは限界が来たのか突然倒れた。

後から来た他の分隊により、ネメシスは回収された。

まだ助かる見込みのある隊員は回収されたが、もう手の施しようがない死体などは森の中に捨てられた。

隊員達が撤収する時にセルゲイたちが来て、この事件の首謀者と話をした。

どことなく事件と外れて、新たな事件を作り壮大な被害を作ったネメシス

幻想郷の異変は生物災害以上の災害であることを知ったU・B・C・S達

と、撤収の際にシリアスっぽい雰囲気を出していったが、セルゲイと事件の首謀者による発言で崩れてしまった。

「「宴（宴会）をするぞー（わよ）」」

えーっと・・・最近思いつかなくなつた今日この頃

そして小説を消すことは物凄く大変な行為であることも知つた今日この頃

がんばつて上級者並みに書けるように頑張りつゝと頑張つた今日この頃

・・・結局殺そつと思つたキャラは死なかつたしな・・・

・・・そだ！次はハנק・・・は・・・やめて、アイアンズ署長と  
ベンとその他東方キャラを出してみるか！

・・・BHOを主体にしてよかつたのだれつか・・・いや、やあや  
「一東方要素を入れなくては！  
・・・ああ、そだ、ネメシスは出できません・・・

「ガハハハハハツ！」

事件のあつた日の夜、事件の起きた「紅魔館」で宴会は行われた。紅魔館は改めて見ると、夜でもわかるほどに真っ赤な建物だった。建物は、かの「アークレイ山地」の洋館以上に大きく、そして豪華だった。

そして、その館の前庭で宴はやつていた。

宴はこの事件で酷い惨劇が起きたと思えないほどの賑わいを見せていた

ある兵士たちは笑いながらワインや酒を飲み、コスプレと思わせるよつな少女達と会話をしたり

その少女たちと飲み比べや腕相撲などをしたり・・・とにかく凄い賑わいを見せていた。

そんな中、セルゲイと「ドライ」と、事件の首謀者である「レミコア・スカーレット」と

拓郎を救い、ネメシスと戦闘して唯一無事に帰つてきた、レミコア・の従者”十六夜 咲夜”

その4人の代表者…つぽい者たちは、庭を見渡せるグランダで話しをしていた。

Ginovaef Side

(なんで…なんで”幼女が主”なんだ? )

現在ニコライは、セルゲイの隣の椅子に座り、赤眼蒼髪の背中に悪

魔の羽のよつたものを生やした幼女と

その幼女の後ろに立つているメイド長の女性をチラチラと見ながら  
そう思つていた。

『失礼ですが… ここの館の『主人はどうぞ？』』

そうセルゲイが事件の後に言つたのはいい思い出

その”ご主人”が涙目となり、メイド長が拓郎を抱ぎながらセルゲイの後ろに現れ、首筋にナイフを突きつけていた。

（あの時は、キモが冷えたなあ）

撤収準備中の部隊がメイド長へと銃を向け、ニコライは主のレミリアの後ろへと素早く回り込み、こめかみに銃を突きつけていた。

その時のセルゲイの表情は、ニコライを横目で睨んでいた。俗に言う『ジト目』である。

そのようにいろいろあつた一日の思い出にふけていたら、レミリアが口を開いた

「いきなり聞くのもなんだけれど、フランを懲らしめたあの鬼は一体何？」

「フラン？誰だ？私はそんな名前の奴は知らないぞ？」

「大佐…拓郎一等兵が運ばれる前に運ばれてきた娘のことではないでしょうか？」

ニコライ達が無線で状況を視察しているときに、一個の小隊の無線が通信不可能になつた。

その小隊の状況を判断すべく、最後に途絶えた位置へとほかの隊を向かわせて返答を待つていた時、メイド長が一人の少女を抱えながらやつてきて、『保護して欲しい』と言つてきた。

最初は訳が分からず、聞いてみたら『ある男が私たちは敵ではない、そして私たちの指令本部が近くにあると言つてきたから保護してもらおう』と思つて來た』と言つて、少女を渡してきた。

少女は金髪で、背中には七つの宝石が付いている羽があつた。

名前は聞いていなかつたが、多分その少女だろ？…とニコライは思つた。

ちなみに、現在フランは庭で楽しそうにはしゃいでいる

「そうです。妹様は能力の制御ができず、危険なために地下室で幽閉していました。しかし、あの妹様が怯えるほどの鬼は一体何者なのでしょうか？」

「さつきから鬼鬼言つてゐるが…あれは私の息子だ。」

「え?」

「え?」

メイド長の問いに、セルゲイは事実で返した。

「あれは私らで作り上げた元生物兵器の”T·N·E·M·S·I·S”の改良型です。自我・声帯器官を取り入れるのはかなり難しかったのですが…まあ一応大佐の息子様でございます。」

「一応ではない、あれは私の息子で間違いないのだからな」

「そうでしたね」

「「ガハハハツ…！」」

ニコライとセルゲイの会話についていけず、呆然とした表情で固まつていた二人は再び動き出し、メイドは問い合わせてきた

「その息子様は、私が駆けつけた時には無数…・・・うふつ」

その時のグロテスクな光景を思い出したのか、今までの威厳が取

れ、吐き氣がメイドを襲つた

「咲夜… 今日はもう休みなさい、あとはなんとかするわ」

「ですがお嬢様わたくし「いいから休みなさい…」…ハイ」

メイド長は渋々といった感じでグラウンドを後にした。

「で？ 本題の本題に入るけど、あなたたちは何者？ 運命が常に途絶えているのだけれど」

メイド長の姿が見えなくなるのを確認したあと、ヘミリアが質問をしてきただ。

「何？…運命が見えるのか…？」

「ええ、私は『運命を操る程度の能力』を持っているのだけれども… あなたたちの運命はとの昔に途絶えているのよ」

「…悪いが、その質問の答えを教えるわけにはいかんな」

「え？」

「我々は数々の悪業を前世で行なつてきた。それが正しいと信じてな…だが、状況が変われば考え方も変わる。それに、その時の悪業

と惨劇・悪夢を知りたいのか？死がどんなものかを知りたいか？悪いが…君のよろくなお子様にはまだ早い

「…

レミコアはその返事を聞いた後、真剣な顔をして、考え始めた。しばらくした頃

「そう、ね…わかったわ、この疑問は心の奥にしまっておへわ

「流石主だな、いい選択だ。さて、私たちはずいぶん帰らせてもらおう…」「アライ

「わかりました」

「アライはベランダから去つていった。

「今日せこりごと感謝する。またいつか会おう、我が同志よ」

「やうね」

セルゲイはそう言い残し、ベランダを後にした。

残されたレミリアは、ビニが嬉しそうな、そして寂しげな顔をし

「同志…ね、フランを元に戻してくれたのはありがたいけど、同じ主としてカリスマの差が違ったなあー」

さつきまで賑やかだった庭を見渡し、さつきまでせしゃいでいたフランと楽しそうに会話をしていた者たちを思い浮かべながらさつぶやいたレミリアだった。

後日談だが、フランは地下室から出て、今まで避けられていたのが嘘のように紅魔館のみんなと楽しく過ごし始めた。

その姉のレミリアはと、メイド長に説教をされていた。『寝るときはベッドで寝る』だのなんだの…ちなみに、今まで忘れ去られていた門番は、何事も無かつたかのように門に寄りかかりながら眠っていた…後々メイド長に見つかって、頭にナイフを投機されたのは言つまでも無い…かもだけれど

今思つ出したナビ、ネメシス主役じゅぎゅー！

何気じに拓郎といつたりキャララが主役つぱくなつやけつてゐる・・・

読み返してみればみるナビ……。」

## 設定集：『傘無しの郷』について

- ・傘無しの郷

もつ一つの入りのように見える場所

だけど実際は違う

地上には

5階建てのよつたマンションタイプの寮

大学病院のような医療施設

そして、中央にでっかい本部のような物がある。

2階建て事務所のような談話施設

あとは滑走路があつたり道路があつたり工場があつたり

兵器倉庫があつたり訓練場があつたり

土地の広さは霧の湖2個分

- ・施設の数

本部＝1個

医療施設 = 1個

寮 = 4個

工場 = 2個

倉庫 = 4個

訓練施設 = 3個

談話施設 = 1個

・その他

どつかの避難施設というか刑務所みたいな門やへいが構えられている。

傘無しの郷は地下も全部つながっている…一つの都市になっちゃっている。

遭遇した妖怪は…排除

時々やつてくるMs.・パープルと名乗る女性は、セルゲイ・ニコライに並ぶ偉い人になつている。

娯楽施設などが無いため、隊員のほとんどは訓練以外の時間は人里で過ごしていたりする。

地下にも娯楽はあつたりするが、近未来的な娯楽より、古典的な娯

楽にハマつた者が多く、やはり人里の方が多い

・・・伝わるかが心配だ・・・

これで理解してくれると嬉しかったりする。

況れんじホルノと時々…（前書き）

明日はサバゲーだ！オラーワクワクすつぞ！

・・・ってなじとはジーでもよくて、ちょっとワカタクしうぎて落ち着けないからネメシスを起動させます。

呪わないとホルノと時々…

「ん・・・」  
「？」

『やあー久しぶりだねー。』

「あつ呪わん…。」

田が覚めれば真っ白な世界と、田の前に…呪わん

『ビハだい？ 転生した先は』

「よくわかんないけど… なんでネメシス？ それと、なんでセルゲイ  
とかニコライが改心してんの？」

『ああ… それはね、お前が心配だからね… でも、突然形態変換した  
時は我を忘れていたね』

「え？ うん、あれってビハやれば平常心を保てるよ！ なるんだ？』

『それはな、適当に過ごしていればその内保てるよ！ なるわ！』

「くふー… ゆくわかんないや。」

「あと、向こうへとひきだは記憶の中へ遡りが現れるのせビハつて  
？」

『違ひ？違ひって？』

「なぜかバイオ知識と東方知識が抜けてるんだよ…ある「J」とした  
りすると一時的に戻つてくるけど」

『…』

「あと、『J』がどこで呪さんがなんど『J』なんだと『J』にいるかも知り  
て『おーーー』え？」

『え？ あー！ わりいな！ 時間だ。じゃあなー。』

ずっと会話していると、突然声が聞こえてきて、真っ白な世界が一  
転して、河原と真っ赤な川だけの世界になつた。そして、その川に  
浮かぶ一つの船と一人の女性…でかい鎌をしょつているから死神？

「おーーー！」

『わかつてゐつてこまつちやん』

「あれ？ あつちは？」

『弟、まだ死んでないから運ばなくていいよ』

「そつか、じやあその弟さんや！」

「え？ あ、ハイ！」

「おひひせへ寝ひたあたひう」

「はあ・・・」

（死神に誘われるつて…ハンクだつたらよかつたのになあ）

ハンクとは、今は無き地獄の街”ラクーンシティー”に、とある“物”を回収する部隊の一人である。

その時の部隊もハンクを残して全滅。ちなみに、ハンクは豆腐好き

「おっと… なんだかんだ？ じゃあ少しひに来たら私の名前を呼んでねー」

「わかりました」

Cirno Side

「アタイつたらここまでこれるなんてサイキョーね！」

「チルノちゃん、やめようよ、なんだか怖いよ？あの人達」

「うわー広いのだー」

「いろんなものがあるねー」

”チルノとその友達たち（バカルテット）”が、傘無しの郷の門の前に立っていた。

列になつていて、先頭からチルノ・大妖精・ルーミア・リグルの順に並んでいる。

「ねえねえおじさん！」

「ん？」

チルノは門の警備係の人に話しかけた。

「なんだい？迷子かな？」

「ううん、違うの」

チルノはそう言つて、その警備係の人の顔に手を向け……

「へ？！」

「凍符『パーカクトフリーズ』！」

「「ええええええええ？？？！－！」」

「ちょ、チルノちゃん！何やつてんの？！」

「ここの人を見つかつたらやばいよ！早く逃げなきゃ！」

チルノの突然の行為に焦る大妖精とリグル

「こいつ食べてもいいのかー？」

「うんいいよ、アタイが倒したんだからね！」

「ちょー！ダメに決まってるじゃないか！」

食欲を満たそうとするルーニアと、すんなりそれを許可するチルノ、そしてそれを全力で否定するリグル

凍られた警備係はと、所々氷が付いているが、遠くから見ればただ固まっている状態

…つまり凍っている。

「あー！次にいくよーーー！」

「ちょ、チルノちゃん！」

「え？待つてーーー！」

「そーなのかー！」

Side out

T · N · E · M · S · I · S  
Side

「ん・・・」

ふと田が覚める。自分はベッドに寝かされているようだ。

(どうこうことだ? 生物兵器ならどうかのポッドみたいなケースの中に入れてあるはずだが…)

田覚めて早速頭に疑問符が浮かんできたが、そんなことを考える暇も無しに、殺風景な部屋のドアが開いた。

「シシヨー———！」

「わわつ！勝手に入っちゃダメでしょ？！」

「そーなのかー？」

「そーなの！」

「……」れは一体

ゾンビの如く、チルノとその友達がなだれ込んできた。

「シシヨー——つて、あれ？シシヨーがいないぞ？」

「ねえねえ、そのシシヨーつてどんな人？」

「シシヨーはね！フツーのオーヨリ怖い顔なんだけどね！——つても  
優しくつてサイキヨーなんだ！」

「じゃあ違つね、ここのお兄さんたちもんと謝らなきゃ

(いや、俺がそのシシヨーで合つてゐるんだ……え？今なんて言つた？)

チルノ達のやり取りを聞いて疑問が浮かんだネメシス

チルノ達が病室に着いたあと、交代にやつてきた隊員が凍っている同僚を見て、警報を鳴らさずに腹を抱えて笑い転げてしまった。その隊員曰く「顔が WWW 顔が WWW」だそうだ。  
もちろん、後々解凍してもらったが、あとでその同僚がその隊員に文句を言つたそうだ。

## 況れどモルノと時々…（後書き）

あ、いつもの事だけね…

えーっと、見てくれたら嬉しいですけど、この質問も答えてくれたら嬉しいなあなんて

1次の事件は次の異変に行く

2次の事件はラクーンシティーに飛ばす（一部東方キャラを連れて）

このどっちにしようか迷ってるんだよね…だから答えてくれたら嬉しいな。

あと、またいろいろと変換しましたーw

…じゃなかつた。ネメシスの名前だれか考えてくれませんかー…

なんだか書きずらいし思いつかないんですよー…

変わる肉体と依頼（前書き）

ハア…雨が降つてサバゲーが…鬱だ…  
Blurryの「Puddle of Mud」- 聴きながら更新するか…

## 変わる肉体と依頼

「あーっと……そこの君、今なんて言つた？」

「え? だからお兄さんって……」

びつやから、ネメシスの聞き間違えでは無かつたようだ

「ん? その声は……シシヨー!」

突然チルノが叫び、ネメシスに抱きついた。

チルノの肌が、ネメシスの肌に当たった瞬間の感想はそれである。と、ネメシスはまたも疑問に思つ点が見つかった

（あれ？なんで温度が感じ取れるんだ？）

ネメシスは温度に鈍い… というか生物兵器は基本、兵器として活動するために余計なものは除かれてる。

と、また疑問に思つてゐる時に、廊下を走る音が聞こえてきた。

その音がドアの元まで近づいて…

「我が息子よおおおおおおおお…－－－－－－

「大佐あああああ－－－廊下を走つてはいけませええええん！－－－－－！」

…セルゲイヒーロライがやつてきた。

二人ともかなりの距離を走つたのか、ゼエゼエと吐息が漏れている。

「おお…これは、やはり優秀な人材が多かつたのだな…」

「だから言つたじゃないか！渡した報告書はどうしたんだッ……あ、すいません…つい…」

「報告書？ちよつと見させてくれませんか？」

「『ライがセルゲイに怒声を浴びせるとこう珍しいイベントはスルーされ、ネメシスはその報告書を見てみようと思つた。

ちなみに、浴びせられたセルゲイはポカンとしていた。

「ん？ああ……わかつた、これから持つてくれる」

「ライはそつて、部屋から去つていつた。

「アタイもビックリなおじさん達だ…」

「す、かつたねー」

「怖かったのだー」

「そうだねー」

部屋の隅から聞こえてきた声…バカルテット達だ。

上から順番にチルノ 大妖精 ルーミア リグルの順で喋つていた。

「おや？… フム… お嬢さん達、お見舞いかな？」

セルゲイは表情を戻し、部屋の隅にいる4人に話しかけた。

「ちがうもん！アタイは弟子入りしに来たんだもん！」

「え？ 違うでしょ… お見舞いでしょ…」

「え？ ああ、 そうだつたそうだつた。 シシヨーにこれあげる…」

チルノはスカートのポケットから小さな綺麗な玉を渡してくれた。

「ありがと」

ネメシスは受け取ったあとにそつ答えた。

その後、二コライがやつて来て報告書を見せてもらつた。

「私たちはもう兵器としての開発などに力を入れる必要は無い」と思いましたので、少々人間に近づけてみました。」

報告書には、顔写真と全体の写真が貼つてあり、身長、体重なども書かれていた。

顔は、前のように肉と肉を無理やり縫い合わせたような顔ではなく、歯茎も剥き出しではない…

ただ、目は白いままだ。

肌の色はむちゅっと赤い茶色のよつた感じである。

体重は260kgで、身長は289cmといつ巨人である。

（惜しい…あと110cmあれば量産型に追いつけたのに…）といつが、もつ人間とあまり変わらないなあ

ちよつと背の低いく、色が赤っぽいイワンとでも言えぱいだらつ

あと、報告書の最後に、重大な事が書かれていた

『触手は、養成所にいた巨大ビルを題材にし、型を留められるようになつてゐる。これで見た目はばつちし人間だね！やつたね！』

最後のは分かんないが、とにかく触手も型を変えられるよつだ。

試しに、自分の手が見える位置に手をかざし、手の形を変えてみた。

「ねおお~。シシリーの手が変わったぞ!」

「すごいねえー」

「おいしそうなのだー」

「アチャんは相變ねじすたね」

バカルテットの個性的な感想を聞いていたら、ドアの壁がノックされた。

「失礼してもよろしくて？」

そこには、胡散臭い笑を浮かべた女性が立っていた。

「あ、おお」

## 「バンツ」

「あ、『じめんなさい』？ 手元が滑つたりやつたわ」

「 」「 ピイ・・・ 」

チルノが何か言いかけた瞬間、その女性の扇子が折りたたまれ、チルノの足元に刺さった。

「 おお、これはこれは、 M s . パープル嬢ではないか。 」

「 どうもー 」

その M s . パープル嬢は扇子を抜き取り、口元を隠してまた笑みを浮かべた。

M s . パープル嬢は、ドアノブのような帽子を被り、白衣を着て、伊達めがねを着けて、白衣の下にドレスを着込んでいる。

そのような格好なのに、綺麗な金髪と金色の瞳だから、よりミステリアスになっている

「 で? 一体どのようなご要件で? 」

セルゲイはパープル嬢に尋ねる

「えーっと、ちよつとお願い事があつてね

「ま、それは一体?」

「部隊を編成してくれないかしら」



## 変わる肉体と依頼（後書き）

あー……やつちまつたぜ……

もつ質問なんて「オワタ~~~~だ！」

ちゅうとラクーンに飛ばす。

ちなみに、このパープル嬢が誰だかわかるよね？

……相変わらずキャラ崩壊が激しいな……

名前もいまだに決まってないし（ネメシスの）

日常系がほとんど入らない気がする……戦闘描画苦手なのになんでこ  
うも戦闘に行っちゃうんだ？……

□ 離離れた傘の傭兵（前書き）

拓郎や兵士を主体として進めていく話の場合は、タイトルの最初に  
「」を付けることになりました。

あと、Hスコンの曲聽きながら書くと掛るわ～・・・も一 個書こ  
うかな・・・

## U 隔離された傘の傭兵

セルゲイ達が今所属している軍はUmbrella · Biohazard · Countermeasure · Serviceといふ名前だつたが

Umbrella · Isolation · Countermeasure · Service «隔離した傘の傭兵»といふ名前になつた。

U · I · C · Sは6人一組のチームが一つの集団として出来ている。ちなみに、チームは必然的に6人になる。

そして、そのU · I · C · Sの基地は、傘無しの郷である。

出入りは基本、変な奴や害をなす奴でなければ自由だつたりする。

そんな傘無しの郷に住み、U · I · C · Sとして活動している人たちに視点を向けてみよつと思つ

「 てあるからにして、妖怪や化け物は、耐久力が高く、遭遇した場合はできる限り一人で対処しないようにして 」

紅い霧の事件の後、妖怪や妖精や化け物に関する会議が開かれるようになつた。

参加者は、隊長格の人だけだ。

U·I·C·Sのチームは、全部で6チームある。つまり6人と、あとはその他の研究員やらエンジニアやらが集まつて会議を進めていた。

…重要な席が一つ空いているにもかかわらずだが…

その会議の途中、緊急アナウンスが基地中に響きわたつた

『U·I·C·S諸君、至急本部の方へ集合願いたい』

（は？一体何があつたんだ？）

拓郎の所属しているファーストフォースの隊長のデネブはそう思った。

彼らファーストフォースはネメシス第一形態との戦闘の後、誰一人

として欠ける事無く救出されたのだ。

隊長と一名は捕虜となっていたから無傷であったが…

その彼は汚名返上すべく、会議で役に立つところを見せようとしましたが、急なアナウンスで会議が中止になった。

彼は若干イライラしつつも本部へと向かった。

Side out

U·I·C·S本部の中央にある演説場、そこにU·I·C·Sの戦闘員達は集合した。

そして、その演説場にある演説台に、セルゲイは立ち、演説を始めた。

「えー……皆を集めたのは緊急の知らせが入ったからだ！それは…」

セルゲイが言葉を溜める。

その瞬間、演説場はなんとも言えない空氣に包まれ、失敗は許されない雰囲気となつた。

「私の息子が復活したッ！……！」

〔ザワザワ〕

「なあ、後で人里の団子屋行かねえか？あそここの団子つめよな？」

「おこ、そこのー！訓練場行つてどっちが命中率高いか競おつぜー！負けた方は「一ヒー奢りな！」

「ちょッ！冗談だ！話を聞いてくれ！」

〔シーン〕

「えー…我々・I・C・Sは、幻想郷に侵入したラクーンシティを破壊すべく、準備をしてもらいたい！」

そのラクーンについては、これからM・S・パープル嬢に話してもらう。以上だ

「パチパチパチ…」

「ザワザワ」

「おい！ラクーンだつてよ、消滅したんじゃねえのかよ

「知らねえよ、なんでもまた悪夢を見なきゃいけねえんだよ」

最初はふざけていた兵士達だが、セルゲイの命令を聞いて焦り始めた。

M・S・パープル嬢は、そのような事は想定内だつたようで、落ち着いた表情で演説台に立つた。

だが、M・S・パープル嬢はセルゲイやニコライ達の前にしか出ておらず、U・I・C・Sの前に出てきたことが無いわけで…

「おい、意外と美人じゃねえか」

「ああ、だが、あの胡散臭い笑みがちょっと玉に傷だな…」

また兵士たちが騒がしくなり始めた。

「お初にお目にかかります。Ms・パープルと申します、以後お見知りおきを」

パープル嬢が喋り出すと、魔法のように静まり返る演説場

「侵入したラクーンの事ですが、まずはこの幻想郷について、簡潔に説明してから本題に入りましょう」

「幻想郷は、あらゆるもの全てを受け入れる、全ての理想郷。でも、それが残酷な事を起こす。それは異変、貴方達で言う事件ね。そんな場所だから、今後とも起きないとは限らないわ。」

「で、そのラクーンだけれども、なにか大きな力と何かの力がぶつかつた拍子に入つて来ちゃつたみたいねえ。以上よ」

ラクーンの説明の方が簡素だつたMs・パープルの演説は、これにて終わつた。

そして、今度は二「ライが演説台の上に立ち、最後の言葉を語つた

「戦闘員たちに告ぐ、この任務の開始は2日後だ！それまでは準備期間にする！その間に準備しておくなり休むなり好きに過ごせ！以上だ」

演説が終わり、みんなが演説場から去った後、拓郎は寮に戻った。

「ハア…行つたことのある奴は皆地獄だつた、つて言つけど…どんなところだつたんだ？」

拓郎は、いろいろと地獄を連想してみるが、ありえないことばかりで、全然どんなところだつたかが分からなかつた。

それに、拓郎がこの幻想郷に来る前には既に地図にあつたラクーンの名前や歴史は消えており、そのような名前の都市の存在すらわからなかつた。

拓郎は気分転換に、と思い、寮の屋上に行くことにした。

外は既に暗くなつており、空には夥しい数の星が輝いていた。

「お？」

空を見上げていたら、後から声が聞こえてきた。

声が出た方を見てみると、同じ隊のホークが居た。

「どうしたんだ？」

「いや、気分転換がてらに……な……つたく、ネメシスの暴走の次はあの地獄に避けだなんて……ついてねえな」

「なあ、その地獄つて、どんなところだつたんだ？」

「あ？ ひでえところだつたな……数百万、数十万という人がヤツらに殺され、悲鳴をあげ、助けを求め、祈り、奇跡や神を信じ、狂い、殺し合い、奪い合い、見捨てられたり……ヤツらは死を知らない、肉や血があれば喉や腹の欲求を満たすためにやって来る……だが、ヤツらってのはゾンビだけじゃねえ、殺戮を生きがいとする生物兵器も多々いたさ。もちろん、ネメシスもな……生き残つて帰つてきたのは数えられるほどだけだつたさ……最初は数万と居たのにな。しかも、その地獄を作つた原因是ネズミがウイルスを運んだつて言つしな」

（そんなことで……そのよつた地獄が）

拓郎は、わかつていたつもりだが、正真正銘の現実の地獄を知り、そしてその原因が小動物の行動で起きているという事実を知り、心底驚いた。

「お前、ここに来た時、何か本を渡されなかつたか？」

「え？ ああ、そういえばそのようなものを渡された気がする」

「その本をよーく読んでおけ、こままでアンブレラという企業がどのような事件を起こし、どのような惨劇を作り上げたのが、全てが書いてあるはずだから」

「わかった」

ホークは全部読んだのであらう、本を進めていく時のホークの顔が一瞬悲しそうになつていて。

「…なんだか、気分転換のつもりで来たのに、暗くなつてしまつたなあ」

「ああ、すまない…」

「なあ、明日チームの奴みんな呼んで装備とかいろいろ揃えよつづ

ちよつとした憂き晴らしだらう。その提案を拓郎は承諾した。

その夜は次の日の朝早くに寮の入口に集まるように待ち合わせをして別れた。

部屋に戻っている途中に通り過ぎるドアから聞こえる泣き声を聞き、無事に帰れるか心配になる拓郎だった。

ハイ、シリアスっぽくなつちゃいました。

コメディーがあ・・・

ハア～・・・そういう中間テストが近々あるなあー・・・

風邪こじらせてサボるかー。w

あ、誤字脱字、指摘などなど

あと、ネメシスの名前があつたら教えてください

## 現時点での設定集（前書き）

現時点までの設定だよー…

ネメシスのステータスは無いよー

## 現時点での設定集

U · I · C · Sのチーム一覧

### ファーストフォース

隊長：デネブ  
1：拓郎  
2：ガルヴ  
3：ノルヴァ  
4：健斗  
5：ホーク

### デルタフォース

隊長：クラリス  
1：ネッガ  
2：ギヨムニール  
3：ザック  
4：ホー  
5：ライアン

### アルファチーム

隊長：祥太  
1：ガンガ  
2：ディラン  
3：ヴェンリル

4 : ミレオ  
5 : ボブ

チャーリー

隊長 : イヴ  
1 : エヴァ  
2 : リー

3 : レア  
4 : クリストイーン  
5 : 美恵

グレゴリ

隊長 : ケビン

1 : レオン  
2 : マイク  
3 : ジャック  
4 : ミン  
5 : チヤン

ガリル

隊長 : ミニ

1 : サン  
2 : ナヴェル  
3 : ウーリヤ  
4 : ナオ  
5 : 隆司

U . I . C . Sの乗り物

ゴニットが接続されているブローニングM2  
ツフラットベッドハンバー

UH - 60ブラックホーク

アパッチ

F - 15

F - 12 ファルコン

F - 1

その他

・ U . I . C . Sと傘無しの郷

セルゲイ達が今所属している軍はUmbrella . Biohazard . Countermeasure . Serviceという名  
前だったが

Umbrella . Isolation . Countermeasures . Service ≪隔離した傘の傭兵≫ という名前になった。

U·I·C·Sは6人一組のチームが一つの集団として出来ている。

ちなみに、チームは誰か一人が死んだとしても、必然的に6人になる。

そして、そのU·I·C·Sの基地は、傘無しの郷である。

傘無しの郷への出入りは、基本変な奴や害をなす奴でなければ自由だつたりする。

- 通貨

他の場所から来た奴は普通の金でいいが、U·I·C·SにはU·I·P·T (Umbrella Isolation Point) という専用通貨があり、訓練でいい成績を出したり、依頼の報酬とももらえる。というか、基本働けば貰える。

U·I·P·Tはカードへの振込式で、寮に設置されている機械でポイントの出し入れが可能

ちなみに、貯金機能はチーム共通。

- 傘無しの郷の建物

U·I·C·Sの寮は3つ建つており、2つのチームが1つの寮を使い、部屋分担は一人一部屋ずつ使つてゐる。

工場では乗り物や兵器が開発されたり、一部娯楽道具が開発されたり…

その工場の地下にある地下研究施設では、生物兵器ではなく、人口生物や薬や食べ物が作られていたり…  
ちなみに、この研究施設と地下都市は別で、研究施設は工場と医療施設につながっている。

事務所のような談話施設はチーム同士でなんらかの事をする時や、外から来た人との会話用の施設

本部はデカく、郷の5分の1を占めている。

全施設に繋がっている地下都市…現代的な娯楽施設があつたり、兵器を販売している店があつたり、商店街があつたり…大きさとしては、本部の1・5個分なので、そこまで広くない。  
ちなみに、大人の…というような施設は無い

展開速度早いかなー…

あと、何気にネメシスがコメディー担当で拓郎がシリアル担当っぽくなつてるのは気のせいだよね？

## 一方その頃の幻想郷は・・・（前書き）

なんかB.I.Oキャラばっかりだつたからねw

一応東方でもあるということを忘れちゃいけないからw

・・・まだ出してないキャラを無理やり出します・・・

一方その頃の幻想郷は・・・

？？？ Side

彼女はMS・パープルとして活動した後、傘無しの郷を出て、博麗神社の居間にに行った。

「えー… 本日お集まりいただいた理由は、最近侵入してきた街のことです。」

そう言って、彼女はまた胡散臭い笑みを浮かべた。

居間に集まっているのは、各場所の代表者である。

人里からは守護者

妖怪の山からは羽が4つ付いている天狗

冥界からは三角巾を着けた女性と白く丸い幽霊のよつなものをまとっている少女

迷いの竹林からは美しい少女と赤と青のモノクロの服を着た女性

紅魔館からは幼き主とその従者

魔法の森からは白黒の魔法使いと、人形をまとっている少女

あと、おまけで紅白の巫女

「で？ そのまちってのは何があるの？」

とてもダルそうに巫女が聞いた。

「ええ、実はその街には伝染病があつてね、妖怪でも感染すると危ない病気なのよ」

「その病気とは？」

今度は天狗が聞いた。

「生存本能しか無くなる、いえ…共食いをする病気よ！」

彼女の答えに、全員が真剣な面持ちになつて押し黙つた。

「この病気に感染すると、共食いを始めるらしいわ、それと、肉体が腐つても動き回るし、思考も止まつてしまつ。感染した者は、助かる見込みが無いらしいから、神経の中枢部分…人間で言えば脳ね、そこを壊せば動かなくなるらしいわ、それ以外だと倒れないそうよ」

その話を聞き、想像をしてしまったのかもしれない、幽霊をまとっている少女は涙目になりながらも聞き、幼き主は顔を蒼白にしながら従者にくつづいてすすり泣き、従者も顔を蒼白にし、美しい少女も恐怖で顔が歪んでいる。

「他に質問は？」

「その感染経緯を聞きたいわね」

モノクロの女性が平然とした状態で聞いた。

「これはその病気にとっても詳しい人からの情報だけれど、繁殖性が低いから、空気感染は滅多に無いって言ってたわね。だけど、血液感染は逃れようも無いらしいわ。噛まれたり、その感染者の液体を吸収してしまうと、同じようになってしまつそうよ。」

「あと、その感染したときの症状は？」

「感染者は、最初は微熱になつて、だんだん熱が上がるそつよ、そして体中に粒が出てきて、体温が急激に下がる。そして死ぬのだけれども、2時間後に再び起き上がつて生き血や肉を貪り食べるわ」

またも”食べる”という単語が聞こえ、居間の空気が凍りつく

「そ、そのまちは、今、一体どうなつてているんだ？」

モノクロの女性が頷いていた時に、また天狗が震えながら聞いた。

「あなた、さつきからいじ質問ばかりしてくるわね」

「茶化してな」さと教えてくれないかッ！…こつちは真剣なんだッ！」

「あら、失礼…その街は今私の結界で空氣すら入れることを防いでいるわ」

その答えを聞き、今度は安堵した空氣が流れた。

「あとどの質問は？」

他に喋る者がいなくなり、静まり返った神社の居間

「じゃあ、”ラクーン異変”の話はおしまい

「ちよつと待つてほしいぜ」

話し合いを終えようとしたとき、魔法使いがそれを制した。

「その異変に行くのは誰なんだ?」

「この話し合いに出なかつた話題、この異変の参加者の話だ。

「それは、幻想郷の端にある”傘無しの郷”から出でくるわよ

「傘無しの…郷…?」

天狗が疑問に思い、口にした

「あら?」存知ではなくて?紅い霧異変では一緒になつたはずだけれど…

彼女がそう口にした瞬間、天狗の顔が真つ赤になり、拳を震わせながら叫んだ

「そいつらに任せらるべからなら私らが行つてやるッ!」

「では、天狗さん達も行くので?」

「違う!私らが解決してやるんだッ!今に見てろッ!」

そう怒鳴つて、天狗は居間から出ていき、去つていった。

その光景に、みんな啞然としていた。

いつもならこのような取り乱しが見受けられず、凜々しかつたのだが、今回は違つた。

そのような謎に、一人応える者がいた。

「ねえ、賢者さん…わつき、”一緒になつた”つて言つてなかつたかしら？」

「ええ、言つたわよ？」

幼き主の言葉に、彼女は平然と返す

「実は、紅魔館に天狗なんて来てなかつたのよ」

「まあ…」

幼き主の言葉に彼女は驚いた

他にも魔法使いや巫女からも「来ていなかつた」という言葉が聞こえた。

彼女は、自分の言葉に後悔しつつも、話し合いをお開きにした。

一方、妖怪の山に着いた天狗は、階級の高い者を集め、精銳部隊を作らせて、合戦の準備をさせた。

「全員！合戦に備えろ！我々の仲間の仇を取るぞッ！」

一方その頃の幻想郷は・・・（後書き）

あ…時間がきちゃつた…次回は明日か明後日か…はたまたいつかだ  
ね^ ^ ;

しかし、こりこりとやりすぎちゃつたかな…

無理やりが多すぎたしね…

ああ、ちなみにこのラクーン異変に巫女とか魔法使いとか強制参加  
させのつもり

次回は拓郎達の休日を書いて、ネメシス書いてだな…

## U 準備とこの本の買い物（前書き）

帰ってきてアクセス解析してみたら、凄い沢山（？）の人が読んでくれていた。

物凄く嬉しかった。

こんなううううな駄文小説でも読んでくれるなんて…

翌日、昨晩の泣き声が忘れられず、寝不足気味になりながらも寮の入口に到着した。

「よう！」

そこには、元気な姿のホークと、ガルヴとノルヴァが来ていた。それと、若干不機嫌な健斗がいた。

「なあ、『デネブ隊長は?』

この中で重要な人がいなくて、疑問に思つた。

「んあ? ああ、多分もうそろそろ来ると思つよ」

「そりゃ「おーい!」…来たな」

会話していたら、隊長がやつて來た。

「さあ、行こうか」

隊長の一聲で、みんなが楽しそうに話しながら動き始めた。

健斗を除いて

健斗の中では、怒や鬱陶しさが交わり、嫌悪になっていた。

健斗は、いくつもの紛争地帯を回ってきた傭兵だ。父がイスラエル、母は日本というハーフだったが、男性の健斗が産まれたことにより、両親で生活のことについて亀裂が走り、離婚、そして健斗は父に引き取られ、少年兵士という捨て駒として扱わってきた。

罪の無い人を殺したり、敵を殺し、遂には殺しが当たり前のようになってしまった。

常にAKライフルを持ち、体中血に濡れて真っ赤に染まり、戦場の悪魔という二つ名を授かった。

しかし、父親が他界し、母親の元に引き取られた時は、砲弾病にかかりてしまった。

敵がない平和な場所、そこに紛争地帯を渡り歩いた少年兵が来た。常に周りの気配を察知し、対象を探す。そのようなことに疲れて、孤独を好むようになった。

なーんて、長くて実際にありそうな過去は無く、ただ単に寝不足でイライラしているだけだった。

そんなイリイリも、ホークらのハイテンションで、武器庫に着く頃  
こなすでに消えていた。

Side out

「おこー！AKが置いてあったぞー！」

「マジで？ーあ、JPGVHSが置いてあるー。」

現在拓郎たちは、地下都市の武器庫に来ていた。ある。

「おこおこ、あこまじましゃべなよ、トキトキあるまーこー。」

「別にいいじゃねえかよケンドさんよー。」

この武器屋は、ラクーンでも店を開いていた”ロバート・ケンド”といつ人の店だ。

彼は、ラクーンの悪夢が始まつた直後、市民に無料で武器を提供していた。

その後、店に押し寄せてきたゾンビに食べられて死んだのだが…そつから先は謎だ。

ただ、彼をこの傘無しの郷に連れてきたのはM S . パープルであることは分かつている。

この傘無しの郷の兵器などの素材も、M S . パープルが提供してくれている。

どの素材も、使えなくなつて捨てられたり破棄されたりした物を拾つてきているらしい。

正直、M S パープルは傘無しの郷には必要不可欠な存在だ。

その素材を溶かしたり分解したりして兵器を作つているらしい。

U . I . C . S は、入隊したときに入隊祝いとして、M 4 A 1とS I G P R O が支給される。

その他にも、ホークの言つていた本や、教本や装備品が支給される。だが、別にそれだけ使つて訳じやないから、自分で武器や防具や装備品などを一式買つて装備することも自由だつたりする。

拓郎たちファーストフォースは、前回の事件でいい功績を残してい

るため、それなりには貯まっていた。

カルヴとノルヴァとホークは3人で話しながら銃を見ていたが、拓郎と健斗とデネブはそれぞれ別々に銃を見ていた。。

「なあ、ケンド、オススメの銃ってどれだ？」

「デネブは聞いた。

「せうだな……確かに今度の事件はまたあそこに戻るんだろ？あそこで使う銃か……お前なら、ＳＣＡＲじゃないか？ちょっと持つてくる。

「ああ、頼んだ。」

やけに親しそうなデネブとケンドに、拓郎は不思議に思い、訪ねてみた。

「あれ？隊長とケンドさんって知り合いなんですか？」

「あ？ああ……デネブはラクーンでの常連さんだったからな。」

「へえ……」

その後、みんなの武器が決まった。

拓郎はG36で、ホークはM14のSOPMOD、健斗は89式小銃、ノルヴァはM249で、ガルヴはAK47を選んだ。

隊長はSCARを選び、バレルをミドルバレルにして、スコープをグリップも付けてもらっていた。

みんなそれぞれ思い思いの銃を買って、満足していたところ、自分たちの残高が半分くらい減つていて、絶望した。

「ハツハツハ、まあ仕方がないさ、またな、”ファーストフォースの諸君”」

次に、装備品を売っているところに来た。

ここでもホークら3人は一緒に行動し、その他の者は単独だった。

装備品も買い、次にドラッグトップスに寄つて、何故売つてるかが判らない抗ウイルス剤の”デイライト”を買い、地下都市を出た。

みんなが寮の入口に着いた後、最後の休日（？）に、今度は人里に行こうという約束をして、解散となつた。

……やべ、つまく書いてねえ気がする。

……いつも以上に

演説の後（前書き）

短いけど、ネメシスのあの後を書いてみるか。

## 演説の後

T · N · E · M · S · I · S Side

ネメシスは部屋にいた。

セルゲイ達が演説をしている間、チルノ達と話をしたり、遊んだりしていた。

そして、セルゲイ達が演説を終えたあと、Ms · パープルやチルノ達は帰つていった。

誰もいなくなつた一室で、一人になつたネメシスは暇になり、気分転換がてらに外を歩こうと思つて立ち上がり、ドアにに踏み寄つた

「ガツ」

(?)

ドアの近くで、足に何かがぶつかった。

(? : なんだ? この箱)

ぶつかつた物を見ると、箱があつた。それと、小さな紙

その紙を拾つて見てみると、字が書いてあった。ビツヤヒリ紙のみうだ。

（なにに？

『息子よ、お前にフレゼントをやる。H·C·S特製の物だ。なあに、遠慮はこらな。出かける時は、これを来ていくといだら。』

あと、お前の武器だが、本部の方で預かってる。事件当日、もちろんお前は行くよな？

だから、その日に渡しておく』 …

とりあえず、ネメシスは箱を開けてみた。

中に入っていたのは、ネメシスが前に着ていたロングコートだった。だが、穴の空いていた部分や、鎖のよつなベルトが無くなり、拘束具では無くなつたネメシスのロングコートが、そこにはあつた。

そのロングコートを着て、外に出ていった。

外は夕暮れになっていた。

ネメシスは、適当にその辺を歩いていたら、後ろから誰かに呼ばれた。

後ろにいたのは、二「ライだつた。

「ん？」

「息子殿、ちょっと来てもらひ

「え？ え？ ！ ちょっと！」

訳もわからず、手を引っ張られてたどり来たのは、先ほど出たばかりの医療施設ではなく、その地下の研究施設だつた。

「え？ 二「ライ軍曹ー？」

その研究施設の奥に、でっかい真っ白な空間があり、そこにネメシスは閉じ込められた。

その後、その真っ白な空間に、アナウンスが流れた。

『これより、リハビリ及びコートの性能実験を開始する』

アナウンスが流れた後、自動ドアが開くような音が聞こえて、大量のゾンビが現れた。

「う、う～」

「ああ～」

もののすゞい沢山のうめき声と、キツイ異臭が空間に広がった。

『レベル1』

そうアナウンスが言つたが、正直ネメシスは何をすればいいか分からなかつた。

『何をしている、早くそいつらを倒せ』

ネメシスは、まず田の前に近づいていたゾンビの頭を、軽く殴つてみた。

「グチャツ」

（え？）

ただの小突きだったのだが、スイカが弾けるように頭が無くなつた。

その後、そのゾンビは力無く床に倒れた。

今度は、集まつてゐるところを狙い、腕で横殴りをしてみた。

予想通り、ゾンビの頭が潰れたあと、体と共に吹っ飛び、まだ力の残つていた拳が、ほかのゾンビの頭に当たり、その頭を潰してまた吹っ飛ばし…吹っ飛んでいった先にいたゾンビに当たり、当たつたゾンビが倒れる。

「…」

それからネメシスは、ただただ何も考えずに無言でゾンビの頭を潰していく。

『レベル2』

最後のゾンビの頭を潰したあと、今度はケルベロス…犬のゾンビが現れた。

これは、動きが素早くなかなか攻撃が当たらなかつたが、飛びかかつてきたときに殴つたり、首を掴み、へし折つたりして全滅させた。

### 『レベル3』

今度は、エリミネーターとマントヒビをゾンビ化したような生物兵器が現れた。

これもケルベロスのように容易く殺していく

### 『レベル54』

あれから大量のプラント42やハンター、ブラックタイガーナビなどのいろいろな生物兵器（B・O・W）を殺していく。

中には、”ガナード”や”ディジュジュ”といった寄生された人間も居たが、容易く殺していく。

次の目標は何か何かと待つていたら

3メートルある身長

右手に付いている長く鋭い爪

左胸から露出していながらも、力強い脈を打つている心臓

「量産型タイラント」が現れた。

「は？」

そう言つた刹那、タイラントは素早く動き、右手の鋭い爪をネメシスに向けて突く構えに入つていた。

「ツ！」

ネメシスは横に避けて、鋭い爪が空を突いた瞬間、タイラントの右腕を掴み、肘を折曲げ、そのタイラントのデカい心臓へと突き刺した。

タイラントは雄叫びをあげたあと、力無く横たわった。

ネメシスは、自分のようにまた再起動してもうと困るので、頭を踏み潰して砕き、心臓を抉り抜いた。

#### 『レベル55』

ネメシスは、休憩する暇も無く、その後もまだ続していく戦闘に疲れながらも、戦い続けた。

その後もレベル170まで戦闘していった。

途中に出てきたT-103や、ティロスなどに苦戦しつつも、なんとかクリアした。

真っ白い空間から出た先に、笑顔のニコライがいた。

ニコライは、「お疲れ様、付いてこい」と言ったあと、出口に向かって歩いていった。

ネメシスは、引きつった笑顔で「あ、ああ」と言ったあと、ニコライについて行つた。

外は日が変わり、太陽も空にのぼっていた。

その後、戦闘でボロボロになつて汚れたロングコートを、装備品の売っている場所に出し、予備を2つ貰つて、医療施設に戻つた。

医療施設に戻り、自分の居た部屋に入った。

部屋に入つて、寝ていた布団に入つて、睡眠に入った。

## 演説の後（後書き）

・・・やつぱりダメダメか…

感想、指摘、アドバイス、ネメシスの名前等々

何かありましたら、教えてください。

：キャラが序盤と明らかに違つて崩壊している」とや  
東方要素が少ないのは分かっているんですが…中々直らないんですね。

ハイ

えーっとね、明日と明後日中間テストでした^ ^ ;  
ので、コレ投稿したら、勉強に逝ります。  
あと、来年の修学旅行で行く京都のお土産で、木刀が買えるか考え  
てきます。

「アル、奴らが来るよ」

とある研究室のモニター室に、2人の男がいた。

両方とも金髪で、白衣を着ていた。片方は目の人下にクマがあり、そして瞳孔が開いていてどことなく狂っているようだった。

しかし、口元がちょっと歪んでいて、焦っているようだった。

「ウイル、心配することはない、俺らの駒がいるじゃないか」

もう片方は、サングラスを付けていて、無表情なので表情がよく判らない。

モニターは、数秒経つた後に光景が変わっていく。

二人はそのモニターを見ていた。そのモニターに映っている光景は、とても普通とは思えない光景だった。

とあるカフェを映しているのが一つあるが、数人の人間が、カウンターの前で横たわっている人間に近寄つて、介抱しているようなものがある。

でも、近寄っている人間はどれも、部位が足りなかつたり、首が曲

がつていたりと尋常じやない”人間ばかりだ。

カウンターの前で介抱のようなことをされている人間も、近寄つてくる人間が頭を上下させる度に痙攣を起こしている。それも血の海を作りながら。

そう、これは”介抱している”のではなく、”食べている”のだ。

ほとんどのモニターではその光景が広がつており、中には悲鳴を上げ、助けを求めながら食べられている光景もあった。

音声は肉が食べられている咀嚼音そしゃくや、悲鳴、銃声、怒声、笑い声などで埋まっていた。

その切り替わつているモニターの中に、あのセルゲイ達の演説している映像もあった。

「フン、小生意気なアンブレラの犬が、主に従えていた犬は主がいなきやダメなのだよ」

ウェスカーはそのセルゲイに、宣戦布告をした。

すると、その布告を聞いたかのように、セルゲイがモニターからこちこち田舎を合わせ、ニヤリと笑みを浮かべながら小さく頷いた。

「ウイール、早速駒を集めよつと思つ……お前の作った奴らも少し借りるや……」

「わかつた」

モニターを見ながらそう答えたウイリアムに目だけを向けたあと、モニタールームを出た。

Wesker Side

「…さて、探しにでも行くか」

ウェスカーは、ラクーン警察署 の屋上に来ていた。

このラクーンシティーは、彼の能力の『記憶から創造する程度の能力』により創られた場所である。

彼は前世に、ラクーンの郊外にある、ラクーン全体を映しているモ

二ターの着いた車でラクーンの終始を見届けていたのだ。

その記憶を使い、このラクーンシティーを創つたのだ。

ただ、一部を除いて

ウェスカーは屋上から飛び降りた。

その後ろで、ドアの開く音が聞こえたが、気にしない。

飛び降りた後、警察署の門へと向かつた

「スタアアアズ！－！」

ウェスカーの待つていた駒がついに来た。

前世では、このネメシスを使い、”ジル・バレンタイン”を潰そうと思っていたウェスカーだが、それは昔のことだ。

今はセルゲイ達に対抗するための駒を集めている。

ウェスカーは、意識を集中させ、ネメシスの中に入つていった。

ネメシスは現在、ブラッドの頭を貫いているところだった  
一緒にいたジルとカルロスは、手持ちの銃で応戦していた。

『ネメシスよ』

『?』

『私が予言してやる。これから言つことをやつてみてくれ』

『ダレダ?』

『私が?私は神だ。ネメシスよ、その警察署の入口を抑えろ、そし  
て入らせないようにするんだ。』

ネメシスはR P Dと書かれた看板の下にあるドアを見て、そちらに向かつて走つていった。

ジルとカルロスは、その行動の目的を察したのか、門の方に向かって走つていった。

それを追おうとしたネメシスだが、

『やめろー深追いはするなー。』

ウェスカーが止めた。

目的からそれでもうちや困るからだ。

『ネメシスよ、とある場所に向かえ、お前の武器が置いてあるはずだ。その武器を持った後、ある場所に向かえ、そこにはR P Dの集団がいるからな、そいつらを皆殺しにしろ』

変わりの目的を『えた。

その目的に賛成したのか、ネメシスは雄叫びをあげた。

その後、ネメシスを駒として使えるようにしたあと、  
や、タナトスRも駒にしようと、行動を開始した。

T-103型

W e s k e r 新世界の神……？（後書き）

ウェスカー『意思に侵入する程度の能力』  
『記憶から創造する程度の能力』

あれ？いつもより短くなつて、いつも以上に駄文になつてゐる気がする……

## 敵は、ラクーンにあり（前書き）

えー…見るも無残な駄文を書くことができないよくなりましたー^-^

平成24年新研究つてのが配られたケド…うわああああ…！…！

敵は、ラクーンにあり

『諸君ーついにこの時がやつてきた！』

2日後の早朝、

傘無しの郷の中心本部から、郷全体に響く音で

『今回は、殺した分だけ報酬が増えるぞ！』

誠に不謹慎なことを言い出した。

『生存者を救えば…倍だな』

『ラクーンの殲滅作戦の内容は以上だ。準備が出来次第。ラクーンに向かって任務を開始してくれ。

…ちなみに、嘘をついて稼ごうつたって、そりはいかせないぞ？ちゃんとカウントしてるんだからな』

こうして、ラクーン事件への解決作業が開始された。

一方、その他の場所でも準備が始まっていた。

博麗神社

「…行かなきやいけないのね…」

紅白の巫女が縁側でそう呟く。

そして、持っていた湯呑に入っていた残りわずかなお茶を飲み、立ち上がった。

魔法の森

「…正直、行きたくないんだぜ…」

箒に乗りながら、魔法使いが呟く

「あら？ 魔理沙？」

その呟きが聞こえたのか、偶々そこにいたのか、両肩に人形を乗せている少女が尋ねた。

「どうしたの？」

「せういや、アリスもいたよな？ 話し合いで……なあ、アリスはどう思う？ 今回の異変」

「え？ 異変だもの、仕方のない……で、済まない」となのよね……」

「……」

二人は何かを思い出し、暗い顔になる。その間、重い沈黙が周りにかかるつていた。

「……ねえ、魔理沙……一緒にいかない？」

「……そうだな、よろしくだぜ」

一人は、きのこの生えていた道を進んでいった。

## 紅魔館

「お嬢様、紅茶をお持ちいたしました。」

「ありがとうございます」

とある書斎、幼き主とその従者は、いつもと変わらない感じだった。そんな時、主は何かに気づいたのか、ハツとした表情になり、恐る恐る従者に聞いた

「ねえ、咲夜」

「なんでしょうか？お嬢様」

「フランはどうしたの？」

「妹様ですか？妹様は…宴会以来見てませ…あ

「パチンのところに行くわよ」

場所は変わつて、地下にある図書館

この図書館は広く、沢山の本と本棚がある。

そこに、一人の少女が本を読んでいた。

髪は紫色、メガネをかけていて服装はどことなく寝巻きに似ている。

「パチエ！」

突然、その広い図書館に幼い声が響いた。

「どうしたの？そんな大声出して」

そのパチエ…”パチュリー・ノーレッジ”は、本を閉じて後ろに振り返った。

その先に見えたのは、視界いっぱいに広がる主の顔

「パチエエエエエエエ…！」

「ちょ…うわ…」

飛びかかってきた主に押され、倒れてしまうパチエ。

「パチエ、フラン知らない？！」

「えーっと…ちょっと待つてて」

パチエは、立ち上がり、ある本棚に向かった。そこにあった本を一つとつてきて戻ってきた。

「おまたせ」

そう言つたあと、本を広げ、何かを唱え始めた。

数秒後、本を閉じた後、パチエが不思議な表情をしながら言つて  
きた。

「おかしいわねえ…幻想郷の中にいないなんて…」

「…咲夜、準備はいいかしら」

「いつでも行けます、お嬢様」

こうして、幼き主とその従者も動き始めた。

## 敵は、ラクーンにあり（後書き）

えーっと… 異変参加者はー…

- ・U・I・C・S
- ・博麗 靈夢
- ・霧雨 魔理沙
- ・アリス・マーガトロイド
- ・レミリア・スカーレット
- ・十六夜 咲夜

です。ハイ：

このラクーン異変では、U・I・C・Sの場合チーム別に書いていきます。（前の設定集で出てきた奴）

その他は普通ね…

…ひつひつて自分でフラグ立てておいて失敗するんだよなー…ハア

U ラクーンに突撃（前書き）

隊長：デネブ  
1：拓郎  
2：ガルヴ  
3：ノルヴァ  
4：健斗  
5：ホーク

久々に思いついた。

展開の速さは仕様です… 多分。

## U ラクーンに突撃

「揃つたか」

全部隊の集合場所として指定された本部前

そこに、まず最初にファーストフォースが揃つた。

他のチームを見てみると、まだ揃っていないまばらな状態だ

「えー… 今回、チームごとに一人追加でここにこの住民が入るそうだ。」

「は?」 「何?」 「誰?」

隊長のメンバー追加発言に、チームは興味深々だった。

この事件の解決にあたって、この幻想郷の人物が追加される…役に立つかわからないが、人手が増えるだけでも十分な支えとなる。

「えー… その人物ってのは、”博麗 靈夢”だ」

デネブが名前を言った後、デネブの後ろから姿を現した。

背丈が低く、見た目は13・14の少女

「……おい、俺あガキのお守りなんぞしねえぞ？」

突然、今まであまり意見を出していなかつたノルヴァがそつとつ  
た。

「なッ？！あたしは子供じゃないわよーー！」

「ハッ！どうだかな？」

いきなり相性がダメダメそうな感じの一人を無視し、輸送ヘリの方  
にみんなが向かつた。

『あー…マイクテス、マイクテス…みんな聞こえてるか?』

ホークが操縦席に座っている。助手席には隊長がいる。

隊長が無線機を手に取り、確認をとっている。

その確認に応えた後、隊長が小話を話し始めた。

『ラクーンに着くまで、ちょっとした話をしてやる…』とある田の  
ことだった。

Deneb Side

窓の外に見えるのは、炎上するビル、走り回る消防車とパトカー、  
逃げたり応戦する人

「なあ、任務内容を確認してみてもいいか?」

同じ分隊にいる”カルロス・オリヴェラ”が、質問してきた。

「ああ、”ラクーン市内に取り残されている生存者の救出”だそつだ。」

「ふーん。…ん? おい! マーフィー! あそここのビルに生存者がいるぞ!」

カルロスが窓の外を見た瞬間、そう叫んだ。

操縦者がそれを聞き、そのビルの近くまでヘリを寄せた。

(おーおー…あればもう無理だろ…)

ビルの屋上にやつてきたのは、左肩を抑えながら助けを求めている女性

よく見ると、ゾンビに齧られたであろう出血が確認できる。

「援護を頼む!」

カルロスは、腰にロープを付け、ヘリから飛び降りた。

その降りた場所にマーフィーが行き、M4で援護を開始した。

ヘリの下から銃声が聞こえる。

(何があつたんだろうか…いや、考えなくともわかることか)

女性の出てきた扉から6・7体のゾンビが走ってきていた。

そのゾンビ達の脳天に、1発1発当てていくカルロスの腕は凄いと思えた。

その後、ビルの上にカルロスが降りて、女性と話していたが、女性は噛まれた腕を見せると飛び降りてしまった。

(おいおい、何やつてんだよ…せめて死ぬなら頭を潰せよ)

『……』の後、現地の警察官達と合流して、ゾンビ達を迎撃つていたが、数が多くてな、気がついたら横にいたゾンビに躡まれて死んだ……そして、気がついたらこの隊に入っていた。』

隊長のジョークかと思つたら、ラクーンでの経験の話を言われてヘリの中は気まずくなつた。

『あーあー……悪いな……着いちまつたよ……』

ホークのそのセリフで、みんなが窓の外を見た。

2日も経つたからなのか、悲鳴などはもう聞こえなくなつてこる。しかし、何故か電気は通つていたので、それほど暗くない。

『我々の降下地点は、”時計塔”だ……2時の方向にある建物だ』

ビルやマンショնなどが立ち並ぶ中に、一つ古典的な時計塔があった。

『えーっと… 霊夢と拓郎とノルヴァとガルヴは二の前庭から降りる』

健斗がヘリの扉を開け、ロープを降ろす。"ラペリング降下"で降りるようだ。

「弾は持つたか？！忘れ物は無いな？！行け！－！」

健斗が叫ぶ。叫ぶと同時に、前回賣つた89式小銃で付近にいるゾンビの脳天に鉛の弾を当てていく

健斗の叫び声に続き、ノルヴァとガルヴが降りた。

次に、靈夢が進み、ヘリから飛び降りた

（（（…飛び降りた？！）））

「キヤツ！」

「つむ？！」

素晴らしい反射神經で健斗が靈夢の手を掴み、ヘリに持ち上げた。

「なんて馬鹿なことをしようとしてんだッ！」

「な、なんで？！なんで飛べないの？！」

「いいからとりあえず降りるッ！拓郎ー！」こいつを頼んだ！」

そう言いながら、ヘリの下に近づいていたゾンビ達を倒していく

『… いちいちガルヴ、ゾンビの数が多過ぎる、門を閉じるから援護を頼む！』

拓郎は、ロープを腰に付け、靈夢を抱えながらヘリから降り下していった。

『一ひら拓郎、靈夢と無事着地した。これより、門を閉じる作業に移る』

靈夢は何が起つたか未だに気がつけていない状態のまま突つ立つている。

その間も血肉を求めてゾンビ達が門からぞろぞろとやつて来ている。それをガルヴとノルヴァは、単発射撃で、無駄弾を出さず確実に仕留めていつている。

「拓郎！ そいつをゾーにかしらー わたしと行へー！」

（なんで俺が…）

ノルヴァは銃声の中でも聞こえる大きな声でそう言った。

その声に靈夢は反応して、おれや針を取り出してゾンビにて投機した。

威力が高いのかなんのか知らないが、針は直径1センチメートルの穴を開け、札は肉を切断した。

「なかなかやんじゃねえか！ この調子で行くぞー！」

拓郎も担いでいたG36を構え、次々にゾンビを倒しながら門に近づいていった。

(「こんなに多いのかよ…」)

そして、門にたどり着いた。が

「クソツツ…」いつ固てえぞ…」

「ハア？！」

『「こちらノルヴァー門が固くて動かない！門の外のゾンビは数が多くて進めない！」』

門の外に見えるのは、銃声を聞きつけて来たゾンビ… やつと50・70はいるだろ？集団だ。

『…「こちらホーク、本部より降下場所が変更された。降下場所は警察署近く、そして集合場所は警察署のメインホールになった。…今ハシゴを降ろした。早く来い』

「ハシゴが降りたぞ！走れ！走れツ！」

ガルヴやノルヴァが射撃をやめ、靈夢も攻撃をやめた。

そして、ハシゴくと走つていく。

「あつー。」

その途中、お決まりのよひに靈夢が転んだ。

「ツチ、援護を頼む！」

今までは、ゾンビは足が遅いと思っていたが、実際は違う、血肉を食べるため一生懸命追いかけてくるゾンビは、足が使えないなついていても通常の人間が歩くスピード並に速い。

その欲望の猛者達は、見ても分かるほどに靈夢に近づいていく。

「おーーーちゃんと援護をしてくれー！」

ノルヴァが靈夢を抱えると、走つてこちらに向かってきた。

その後ろからゾンビ達が迫つてくる。

かなり近づいていたゾンビはへりからの援護によつて倒れていくが、それでも多いことには変わりない。

ガルヴがヘリにかなり近づいたあたりでAKを構え、また倒していった。

それに続き、拓郎もG36を構えた。

アサルトライフルのサイトを、ゾンビの眉間から少し下あたりに合わせ、引き金を引く。

銃口から飛翔した鉛の塊は、回転しながら真っ直ぐに飛んで行き、眉間を貫通させる。

貫通した後、ゾンビは力無く倒れる。

この作業を、ノルヴァが来るまでやり続ける。

「拓郎、お前は先に行つて援護をしてくれ

もう少しでノルヴァ達がたどり着く時、ガルヴがそう言い出した。

それを4つ返事で了承して、ハシゴを登った。

「靈夢ー…わつやれと縛れー。」

抱えていた靈夢を降ろし、ノルヴァがそつと書いた。

靈夢は、頷いてハシゴを登つていった。

「 ハー…白か…」

「 ガルヴ、冗談言つてないでさつやれと縛れ」

「 おーけー」

ゾンビがもうそこまで来ているところに、余裕をかましていたガルヴにイラつきながら、自分もハシゴを登つていった。

『あー…お疲れさん。これから、近くのビルに向かうわ』

ホークがそう言ったあと、ヘリが傾いて、動き始めた。

## U ラクーンに突撃（後書き）

…駄文エ…

…直んじゃない…アドバイスとかってありませんかね？

やつぱりチームごとに分けるなんて無理ッ！

撤退だ！（戦略的な）

## ネメシス後タソンヘ（前書き）

やつじだ・・・やつじ悪こついた・・・でも風邪が辛い・・・

サブタイはこつも適切

ネメシスの前はこつも悪こつ・・・

## ネメシス後タソンビ

T - N - E - M - S - I - S Type C Side

時は、ファーストフォースが靈夢と合流した頃

ネメシスは目を覚ました。

目を開けても、真っ白な空間

ネメシスは未だに医療施設の病室が過ごす場所となっていた。

ネメシスは、そっと上半身を起こし、窓の外を見渡す。

窓の外は、このネメシスがいる医療施設の一部の他に、滑走路が見える。

人外としての視覚を發揮して、滑走路を見てみた。

一人浮いた服装をした人を混ぜた一小隊がちょうどヘリの方に駆けて行っている。

その他の小隊は、まだ隊員が揃っていないのか、暇を持て余しているように見える。

(ん？待て、なぜ浮いた服装をしている奴がいるんだ？)

善は急げ。すぐさま駆け出した一小隊に視線を戻す。

だが、もうへりに乗つて空に飛んでいた。

とりあえず、その疑問は頭の隅っこによせて、ネメシスはセルゲイのところに向かつた。

「う”あ～ヴォーウィーオー・”うえうえうえうえ WWW」

ラクーンが幻想郷に入つてから一週間半、ラクーンの住人達に変化があらわれた。

変化と言つても、一部のやつらだけだが・・・

「ボオイア・・・グアエオ・・・アアアア・・・」

とあるラクーンのバー・・・

そこには、中々シユールな光景が広がつていた。

あるゾンは隣に座つているゾンと話し合つたり。

あるウェイター・ゾンは、料理を作つたり運んだり。

またあるゾンは賭博をしたり・・・

・・・そづ、一種の”ゾンビバー”が出来ていたのだ。

「ヴォウ・・・グヴォエドオ・・・」

訳・うえ・・・内蔵が落ちちまつた・・・

「ウウウウ・・・アアアオイエ」  
訳：うわあ・・・またすつちました。

「ポボオウイ」  
訳：肉一個くれ

何を言つてゐるかは理解できなうが、意思が伝わればいいといつこいつ  
ではない。

「ボア・・・・」

訳：なあ

「オオヒ・・・ウオ?」

訳：なんだ?

「ヴォイオエア?」

訳：俺ら何も食べなくてよくね?

何かを思つたのか、ただの疑問なのか、突然ゾンAがよくわからぬ事を聞いた。

「バアア・・・・ヴ」

訳：まあ、そうだな

よくわからぬゾンBは、曖昧な返事で応えた。

そのゾンBの返事で、見てわかるほどゾンAが期待の眼差しをゾンBに向けた。

「ヴァア・・・・ゴ、ガア」

訳：もしかして俺らって、不死身じゃね？

「ガゴイ・・・・ヴァアア」

訳：バカ、頭が吹っ飛べば終わりだ。

今度は、ゾンBに現実を知らされて、見てわかるように落ち込み始めた。

「ヴォヴェゴ・・・・ウェウェウェ」

訳：だよな・・・・ラクーンから出てみたかっただなあ・・・

「ヌ・・・・ソドドヴォ？」

訳：ん？ それはできるんじゃねえか？

そしてまた喜び始めたゾンA

どうやら、幻想入りしたせいか感情を手に入れたようだ。

「モガ、ヴォオウ」

訳：じゃあ、折角だからみんなで行こうぜ

ゾンBは雄叫びをあげ、みんなから注目を得た後、ラクーンを出ることを提案した。

その後、ゾンビバーに居たゾンビの半数が賛成して、ピクニック気分でバーを出て、幻想郷へと歩み始めた。

場所は戻つて傘無しの郷

ネメシスはセルゲイに会つた後、いきなりデルタフォースにゲストとして入れられ、

装備を整えさせられた後、デルタフォースと共にヘリに乗つて郷を飛び立つた。

セルゲイがネメシスに言つたことは、目的地とデルタフォースにゲストとして入るということだけ

何も分からずいきなり飛ばされたネメシスは、未だに混乱していた。

ネメシス後タソンヒ（後書き）

ハイ・・・ぶっちゃけ投げやりです。

思いついたはいいけど、途中からグッチャグチャ・・・  
ヤバいな・・・ありえないほどの駄文だ・・・訂正できるようにな  
つたら訂正しなきや。

あ・・・東方要素が含まれてないや・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6098w/>

---

ネメシスと仲間たちが幻想入り

2011年11月27日10時52分発行